

人生はままならない

んみふり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様の不手際で死んでしまった少年がハイスクールd×dの世界で生きて行く話。  
不定期更新なので、気長にお待ちください。

# 目次

原作開始前

プロローグ

1

波乱の幕開け

長過ぎる一日

前編

5

波乱の幕開け

長過ぎる一日

中編

20

波乱の幕開け

長過ぎる一日

後編

28

交渉戦 前編

交渉戦 後編

ステータス

原作開始 旧校舎のディアボロス

秒読み

事件前夜

青

邂逅

幕引きと幕開け

戦闘校舎のフェニックス 裏

白昼の襲撃者

待ち受ける悪魔達

主導権を握るのは

彼の答えと彼女の推察

ソーナ、始動。

チエックメイト

覚悟

69

75

81

88

94

101

112

119

128

141

156

167

65

39

57

65

英靈顕現

争乱の足音

雨宵の死闘

復讐の在処

彼女の道

200 189 181 175

# 原作開始前

## プロローグ

平凡な人生だったと思う。

別段不満がある訳では無い。否、あつた訳では無い。

平凡、平坦、平和、平穩。

一見すれば面白みの無い事なのかもしれないが、それは酷く尊い物である事を  
自覚している人間はごく少数だ。

だからこそ、今を生きる人間は、生きる事の出来る人間は、その生を嘯み締めるべき  
だと思っている。

だって気を抜いたら、呆気なく死んでしまう様な世界なのだから。

……………俺の様にね。

「本当に申し訳ない!!?!!?」

「はあ……」

唐突ながら、少年——月野<sup>つきの</sup> 幹也<sup>みきや</sup>はいきなり白髪のおじさんに土下座されていた。

あらかじめ言っておくが、新手的オヤジ狩りとかでは無い。

「えーと、確か俺って、2トントラックに轢かれて死んだと思ったんすけど……」

「いかにも……その通りなのじゃが……」

「?」

「あれは儂等神々の不手際でのお。お主は本来死ぬ定めでは無かったんじゃ」

ああ、やつぱこの人神様だったんだ……

などと呑気な事を思わず考えてしまうほど、衝撃的な内容だった。

「それで、俺これからどうなるんですか?」

「本来なら記憶を消して転生してもらおうのじゃが……今回は我々の不手際故、記憶を保持したままの転生になる。……じゃが……」

「?なんか問題があるんですか?」

「うむ……実は次にお主が生きる世界は、その、パワーインフレが激しく、死亡フラグが満載な世界なんじゃ。」

「……」

思わず黙ってしまう幹也。当然だ。今まで生きていた世界などとは比べ物にならない程に危険な世界なのだから。

「それはアレですか、次の世界でさつきと死ぬ的な……処刑宣告的なヤツですか？」

「いやいや！そんな事は無い！」

「いやでも……」

「実はこれからその世界で生きて行く前に、お主に一つ提案があるんじゃない？」

「提案ですか？」

「うむ。その世界に行く前に、ここで修行して、力を付けて行く気は無いか？」

「……はい？」

それは何とも意外な提案だった。

「えーと、護身術って事ですか？」

「それは使い方次第じゃな。儂が教えるのは、その気になれば神と渡り合える程の武術なのじゃから。」

「か、神っすか……」

「というか、そんな物を身に付けないと生きていけない世界なのか……？」

と、首を捻る幹也。

「それで……どうするのじゃ？」

当然答えは決まっている。断る理由などありはしない。

「やります。やらせてください。」

「心得た。夜と月を司る神である儂、ツクヨミがお主を鍛えてしんぜよう。」  
かくして、幹也の人生は、思いがけない方向へと進んで行くのであった。

# 波乱の幕開け 長過ぎる一日 前編

月日というのは意外とあつという間に過ぎるもので。

気づけば二年程の時間が流れていた。

「おめでとう、幹也殿。お主に教える事はもう無いわい。」

「ありがとうございます。」

ツクヨミにお辞儀をする幹也。

その姿を見て、ツクヨミは思わず涙を流す。

「うむ：何だか無性に寂しくなつて来たわい。本当はこのままここに残る事が出来れば良かったんじやが…」

「気にしないで下さい。本当に二年間お世話になりました。」

「幹也殿：しかし気を付けるのじゃぞ？これから行く世界は多くの危険が渦巻いておる。恐らくは他の転生者もいるかもしれん。お主の様な性格なら良いが、我欲に塗れた連中が襲いかかってくる事もあり得る。」

「その為の二年でしよう？」

ツクヨミの不安を払拭する様に笑う幹也。

実際不安はある。恐怖も同様だ。

けれど、そんな感情に押し流される事は無い。

今までの努力が、彼の中に根付いているのだから。

「幹也殿……あい分かった。もはや何も言うまい。これよりお主を転生させる。………  
達者でな。」

そして、月野幹也は転生した。

さて、月日というのは意外とあっという間に過ぎるもので。

幹也が転生してから十年が経過していた。

流石に十年も経てば赤ん坊も小学四年生になる訳で。

幹也は今日もランドセルを背負って帰路へとついていた。

(ランドセルって、こうしてみるとやっぱり重いなく)

などとしみじみ思いながら幹也は曲がり角を曲がる。

ちなみにこの世界での幹也は孤児だった。

なんでも幼い時に町外れの孤児院に捨てられていたとか。

(まさかの孤児院スタートとは…)

最初こそ驚きを隠せなかったが、しかしそこは幹也の持ち前の適応力でカバーした。人間、何事も慣れである。

驚いたと言えば、幹也が一番驚いたのは、今まさにこうして何事も無く日常生活を送れている事だった。

(死亡フラグ満載とか言いながら、割と平和じゃないか…？まあ、何事も無いならそれに越した事は無いけど…)

そんな事を考えたのがいけなかったのかもしれない。

ツクヨミという神によつて鍛えあげられた幹也の感覚が、すぐ間近での戦闘を察知したのだから。

「あー、くそ、ちよつとぼやいたらこれかよ…」

幹也自身、極力関わりたいとは思わない。しかしだからと言つて見過ごすことが正解だと一概にも言えないのが現実だ。

幹也は戦闘が行われているであろう場所へと猛スピードで駆け出す。

(関わるにしても無視するにしても、まずは現状の把握が最優先。蚊帳の外にいたと思つたら、実は戦場の真ん中でした、じゃ洒落にならないからな)

幹也は更に速度を上げる。屋根や塀を飛び越えながら、最短距離で目的地へと向かつていった。

そこは山の中腹辺りだった。鬱蒼と生い茂る木々の上を、幹也は跳躍して行く。  
(あそこだ……あれは……着物?)

見れば、黒い和服に身を包み、頭から猫耳を生やし、腰の辺りから猫の尻尾を二本生やした女性が、蝙蝠の羽を生やした集団に囲まれていた。

(うわー、見るからにガラの悪そうな男だ……)

集団のリーダーと思われる男性は顔や腕に大きめのタトゥーを入れた、ヤンキー風の格好だった。

(さてどうしよう……ぶっちゃけ、ガキの体でも勝てない事は無いだろうけど……)

この際勝算は関係ない。事によっては、負けそうでも挑むし、勝てそうでも逃げる。幹也は情報を得るために感覚を研ぎ澄ます。

すると、ヤンキー風の男が喋り出した。

「ようやく見つけたゼエ!!? 大人しく投降しろよ、そうすりゃ、痛い思いはしなくて済むぜ? いや、ひよつとしたら気持ちイイかもなあ?」

(かなりわかりやすいクズだな……)

男の下卑た言葉に、幹也は嘆息し、和服の女性は目付きを鋭くする。

「お断りにや粗○○ヤロー。そんな貧相なもんで何が出来るつての?」

「なつ、テメ：言わせておけば!!?」

「事実にや。お前みたいなクズが、女を悦ばせる事なんて、出来るはずがないにや。」

遂に、男の顔が怒りによつて赤く染まる。

「ぶつ殺せ!!?!!?」

「やつてみるにや!!?」

男の指示で、今まで遠巻きに構えていた部下達が一斉に和服の女性へと殺到する。

迫り来る集団に、一歩も引く気配の無い女性は、ぼつり、と小さく呟く。

「私は死ね無い…あの子の為にも。」

誰にも届く筈の無い呟き。

その言葉を。

「さて、行くか。」

聞いていた者がいた。

「あ?」

「にゃ?」

それはいきなり現れた。

殺到する集団と着物の女性、その中間に黒い刀を持った少年が割り込んだのだ。

『!?』

突然の事に、僅かに一瞬、全体が硬直する。

「いや止まるなよ、的になるぞ。」

一閃。

あまりにも早く、鮮やかな一太刀。

たった一瞬で、三人の男から血飛沫が舞った。

「ウソ……」

目の前の光景が未だ理解できていないのか、着物の女性は呆けたように立ち尽くす。

そんな様子を気にした様子も無く、少年――幹也は声をかける。

「おい、猫」

「……私の事かによ？」

「他に誰がいるんだ？」

「……まあいいにや。それで、なんだにや？」

「色々言いたい事とか聞きたい事はあるけど、とりあえず一つだけ。」

ああいう決意表明は心の中だけにしておけ。」

「!?まさか、聞こえてたのかによ……!?」

「五感は鋭いんだ。これでもな。まあ何というか、動物の映画で感動して号泣してしまう俺からすれば、ああいうのを聞いちまうと……」

言葉を区切り、集団のリーダーであろうヤンキー風の男に刃を向け、

「体が動いちまうんだ。どんだけ面倒な状況でもな。」

そう言い放った。

ヤンキー風の男はその言葉を受け、更に血管を浮かび上がらせる。

「おいガキ…泣いて謝れば半殺しで許してやるがどうするよ?」

「いきなり襲って悪かったな粗〇〇」

「殺す!!?」

標的を変え、今度は幹也に突撃する部下達。

「だ、ダメ、逃げ」

「おい猫。」

女性の言葉を遮り、幹也は静かに告げる。

「すぐに終わる。じっとしてろ。」

直後に、刃が瞬いた。

(ひーふーみー、三人斬ったから残りはヤンキー合わせて七人か…)

まず幹也が一番近くにいた男を真一文字に斬り裂いた。

だん、

と、肉と骨を断つ鈍い音が辺りに響き渡る。

凄まじい勢いで切断された為か、男の上半身は下半身を残して宙を舞う。

「はえ……？」

男からすれば唐突過ぎて意味がわからないだろう。

標的を見失った瞬間に、自らの視界が回転しながら、自分の下半身を眺めているのだから。

しかし幹也は御構い無しに、一息で左側にいた二人の首を刈り、刀を左手から右手に持ち替え、右側の一人の心臓を貫く。

「ぎ、距離をとっ——」

近距離から遠距離に切り替えようとした男に刀を投擲し眉間を貫き、即座に刀を引き抜くと、そのまま自分の足下で腰を抜かしている男の頭蓋を蹴り砕く。

そして振り向くと、まさに先程斬り飛ばした上半身が、自らの頭より五センチ程高い位置にあった。男の顔は戦慄に染まっていた。

しかしそれも当然の事だろう。自らの仲間が、一瞬のうちに唯の肉塊へと行って行く様を見せられたのだから。

「じゃあな。」

断ッ!!?

と、幹也は宙にある男の首を斬り飛ばした。

「さて、残ってるのは…」

瞬間、幹也に高密度の魔力弾が直撃した。

仕掛けたのは、いつの間にか蝙蝠の羽を広げて空を飛んでいた、ヤンキー風の男だった。

「バアカ。人間のガキが悪魔の貴族に逆らうからこうなるんだよ!!?」

二発、三発、と幹也のいた場所に直撃して行く魔力弾。

「もうやめて!!?」

「あー?」

その光景に耐えられなくなったのか、着物の女性が悲痛な声を上げる。

「ハッ、なんだ、ちつとはしおらしいツラもできんじゃねえか……それじゃあお望みどおり、次はテメエにー!?」

獐猛な笑みを浮かべ、男が女性に飛びかかろうとした時、バランスを崩したのか、男が地面に落ちる。

「チツ、一体なんだって…」

男は自らの羽を見て絶句する。

右側の羽だけがー無い。

「な、なんで…」

「なんでつてそりゃあ、斬り飛ばしたからに決まってるだろ？」

あり得ない声と共に、男の顔から血の気が引いて行く。

見れば、そこには無傷で砂塵を鬱陶しそうに払う幹也の姿があった。

「な、なんで生きて…いや、そもそもどうやって俺の羽を…！」

「原理はあんたの魔力弾と一緒にだよ。あんたと違うのは弾丸としてでは無く、密度と範囲を調整して、斬撃として放ったって所だな。」

「なっ…!!?んな事出来る訳…！」

「出来るからあんたは今そこに倒れてんだろ？ああ、最初の質問に答えてなかったな？俺の魔力防御はそれなりに硬いから。悪いけど、あの程度なら、防御や回避どころか、そもそも届きすらしないよ。」

「は、はあ!!?…」

幹也の言葉に、男だけでなく、着物の女性ですら開いた口が塞がらない。

「さて、そんじや、そろそろ終わらせるか…！」

終わらせる。その言葉に、男は自らの死を幻視する。

「ま、待て！」

「あ？なんだよみつともない。命乞いか？」

「そ、その女は『はぐれ』なんだぞ!!?なんで助けるんだ!!?…」

「なんだそれ？いきなりそんな専門用語言われても知らねえよ。それに悪いけど、俺の知ってるはぐれは、もう少しメタリックだったしな。」

「クツ、オオオオオオオ！！？」

男は足掻くように魔力弾を連射する。

ただしそれは幹也には無く…

「！」

幹也の足下にだった。

砂塵が舞い、幹也の視界が覆われる。

「鬱陶しい」

刀を振るい、砂煙を払うと、そこにもう、男はいなかった。

（意外だ…逃げるとは思わなかった…）

幹也は刀を自らの中に仕舞うと、着物の女性の方を見る。

「おいアンタ、大丈夫か？」

女性はしばらく呆けていたが、すぐに我に返り、コクコクと頷く。

「そうか。なら良いや。次は見つかんねえようにな。」

そう言つて、幹也はその場を後にする。

（あー、疲れた…もう関わる事も無いだろうし、帰つてのんびりしよう…）

所が、そううまく行かないのが現実の無情な所である。

「にゃ〜、待つてにゃ〜。」

「何で着いてくるんだよ…?」

先程の女性が着いてきてしまったのだ。それもご丁寧に猫の姿で。

「おい猫。何で着いてくるんだよ。」

「にゃ〜、私には黒歌っていう立派な名前があるんだにゃ。」

「……………ハア」

思わず溜息を吐いてしまう幹也。しかしそんな様子を特に気にせず、猫…黒歌は幹也の頭によじ登る。

「降りろ…」

「いやにゃ。」

「何で。」

「助けて貰った恩をまだ返して無いにや。私こう見えて、義理堅くて尽くす女なのよ？  
あなたみたいな強い男には特にね……………あ、ねえご主人様、お腹減ったにや。」

「今のお前の何処に義理堅くて尽くす女の要素があるんだよ!!?」  
思わず大声でツツコミを入れてしまうのだった。

「ねえご主人様」

「やめろ。ご主人様って呼ぶな。」

「じゃあ名前教えてにや。私は最初に名乗ったんだからにや」

「……………月野幹也」

「んじゃ幹也って呼ばせてもらうにや。よろしくにや!」

「よろしくしたくねえ…」

「ねえ、幹也、お腹減ったにや。」

「まだ言うか…」

と、そんなやりとりをしていると、不意に黒歌が視線を上に向ける。

「幹也…あそこ」

「ん? 何だよ……………!!?」

一拍遅れて、幹也も気付く。不穏な魔力の流れがある事を。

「冗談だろ…まださっきの戦闘から三十分も経ってないぞ……………!」

「どうするにや?」

「不本意だが行くしかあるまい。気を抜いた所に飛び火してもかなわんからな。お前はここで待ってろ。」

「私も行くにや。」

「大丈夫なのか…場所が場所だぞ?」

「大丈夫にや。今あそこは『正常に』機能してないから、悪魔の私でも入れるにや。」

「……わかった。ただ、ヤバいと思ったたら引き返せよ?」

幹也の言葉に、黒歌は頷く。

それを確認した幹也は、即座に凄まじい速度で、目の前の石段を駆け上がって行く。その横の看板にはこう書かれていた。

姫島神社、と。

## 波乱の幕開け 長すぎる一日 中編

何故そうなったのか分からなかった。

ずっと続くと思っていた日常は、あまりにも唐突に崩れ去った。

少女は自分を庇い、傷から血を流し続ける母に涙を流しながら呼びかける。

「いやあ!!? 朱璃お母様あ!!? 死んじやいやあ!!?」

少女の悲痛な声に、少女の母である朱璃は弱々しく返す。

「朱乃……私は大丈夫。だから早くお逃げなさい……!」

朱璃の言葉に、しかし少女——朱乃は首を横に振る。

「いやあ……お母様と一緒にいる……!」

泣きながら縋り付いてくる自ら愛娘の手を、朱璃は振り払えずにいた。

「安心しろ。娘共々、あの世へと送ってやる。」

神社の境内に、親子のものでは無い、低く冷たい声が響く。

そこには、黒い装束を身に纏った五人程の男達が二人を囲むように立っていた。

「愚かな……堕天使などと交わるからこうなるのだ。忌まわしき混じり物と共に、ここで眠るが良い。」

男達の手にも、魔力が集中する。

(せめて、この子だけでも……!!?)

そう思い、朱璃は朱乃を庇うように抱き締める。

そして、

「やれ」

無情な声が発せられた——

最初に朱璃が感じたのは、痛みでは無く、奇妙な浮遊感だった。

——ああそうか、私は死んだのか。

そんな考えが頭をよぎる。どうしようもない事実を前に、諦めにも似た感情が、眩きとなつて発せられる。

「これが死……自らの魂が、肉体から剥がれる感覚なのでしょうか……はは、結局私は、娘を救う事が出来ませんでしたか……」

「あのさ、唐突にネガティブな発言すんのやめてくんない？びっくりした挙句にテンション下がるとか、一番リアクションに困る訳だし。」

——、——独り言に、返事が返ってきた。

その事に、朱璃は思わず瞠目する。

「とりあえず、あんたはまだ生きてるから、まだその命を手放すんじゃないぞ。」  
生きてる。

聞こえてきた言葉に、朱璃は一瞬思考が止まる。

浮遊感は徐々に収まりつつあり、自らの体を苛む痛みと、自分の体をしっかりと抱える者と、自らにしがみつく小さな者の、二つの温もりを朱璃はしっかりと認識していた。

「よっつ」

そんな声と共に声の主は着地する。

見れば、声の主は自らの娘と、そう歳の変わらない少年だった。

同時に、少年の横に、黒い着物を大胆に着崩した、猫耳の女性が着地する。

「黒歌、お前治療は出来るか？出血が酷い、すぐに手を打たないとマズイぞ。」

「出来なくはないけど、あんまり得意じゃないからにや、その場しのぎの応急処置しか出来ないかもにや。」

「構わない。俺が戻るまで持たせろ。後は何とかする。」

「了解にや。」

黒歌、と呼ばれた女性は、少年の指示を受け、すぐに実行する。

対して、少年は前に出ると、宵闇のような漆黒の刀を構えた。

「あな、たは……？」

朱璃の問いかけに、少年は気怠そうに答えた。

「月野幹也。ただの阿呆だよ。」

そう言つて少年——幹也は敵陣へと突つ込んでいった。

「小僧……貴様なにも」

敵の問いかけなぞ、そもそも聞くつもりすらなかった。

「え」

弾丸のように飛来した漆黒の刀が、男の喉元に突き刺さる。

一瞬で絶命した敵には目もくれずに、幹也は刀を引き抜き、そのまま正面の男の首を刈る。

左右から放たれる魔力をしかし幹也は意に介さない。

魔力は幹也の体に触れる前に霧散、或いは障壁に阻まれ、消滅する。

「馬鹿な……！」

「遅え……」

即座に右側の男を袈裟斬りにし、左側の男の腹を貫く。

「小僧……貴様一体何者だ!？」

「さつきも言っただろ。」

男の困惑した声に、幹也は気怠そうに返した。

「ただの阿呆だよ。」

刃が霞み、男の意識は永劫の闇に落ちていった。

「黒歌！容体は!!?」

「とりあえずは濠いでいるにや。けどこれ以上は…」

不得手な治療を長時間続けたせいも、黒歌の額にはびつしりと汗が浮かんでいた。

「後は任せろ。」

幹也が朱璃の側に駆け寄る。

「お願い!!?お母様を助けて…」

朱乃の悲痛な叫びに幹也は、

「ああ、心配いらねえよ。」

と軽く返す。

直後に幹也の体から、眩いばかりの極光が溢れ出した。

「綺麗だにや…」

「すい…」

あまりにも神秘的な光景に目を奪われる二人。

それは、見覚えのある光だった。

きつとこの星に生きる全ての人間が仰いだであろう夜を照らす光。

星の瞬きを更に際立たせるその光は、

「お月様……？」

紛うこと無き、月の光だった。

それから。

朱乃と朱璃の二人は、後から来た父親とその仲間によって保護された。

二人の様子を見た父親は、二人は何故衣服しか傷付いていないのか？と無傷である事を、喜ぶと同時に不思議に思ったという。

そして朱乃は、

(ツキノ……ミキヤ……)

あの少年を想いながら、父と共にその場を後にした。

一方、その当事者である幹也は、森の中を全速力で走っていた。

「幹也？どうしたにや？そんなに焦って…」

「さっきの戦闘、覚えてるか？」

「にやあ、見事だったにや。でも、それがどうしたにや？」

「魔力弾が来た時、俺のでも、お前でもない障壁が張られた。あの時は援護してくれたけど…」

「まさか…!!？」

「ああ、追って来てる！」

見れば、幹也の表情には焦りが浮かんでいた。

それもそのはず。今追ってきている相手は、先程相手取った雑魚とは比べ物にならない程の気配なのだから。

「お待ちください。」

「!!？」

そして、それは静かに降り立つ。

「…あんたは？」

「私の名は…」

そして、目の前に降り立った女性は、

「ガブリエルと申します。」

静かにそう告げるのだった。

## 波乱の幕開け 長すぎる一日 後編

ガブリエル。

神に仕える四人の大天使の一人。

数多くある神話の中でも、類を見ない程に暴力的な後方の青。

力、或いは裁き、肅清の逸話が多く聞こえる熾天使の一角。

それが幹也の目の前にいる女性の正体だ。

「」

思わず息を呑む。

柔和な笑みに不釣り合いな重圧。

加えて余りにも不自然な登場のタイミング。

身構えない方がおかしい話だった。

「落ち着いてください、私はあなたと戦いに来たわけではありません。」

「……じゃあ何の用だよ。」

すると、ガブリエルはゆっくりと頭を下げる。

「先ずはお礼を。あの親子を助けていただき、ありがとうございました。」

「知り合いだったのか」

「はい、朱璃とは神社の仕事や、彼女の夫である墮天使とのパイプ役として、深く親交があったのです。」

「…成る程、だから混じり物と…」

「愛の形は人それぞれ、それを非難する権利は誰にもありません。」

「当然だ。別にとやかく言うつもりはねえよ。話はそれだけか？」

「いいえ。もう一つは…」

「俺の力の事か？」

その問いに、しかしガブリエルは首を横に振る。

「それもありますか…」

そこで言葉を一旦切り、幹也の頭の上にいる黒歌に視線を向ける。

「そこのはぐれ悪魔を、こちらに引き渡してくれませんか？」

先程の慈愛に満ちた目とは違う。

それは敵を滅する冷徹な大天使のそれであった。

「にやあ、ここまでみたいだにやあ…」

そう言うと、黒歌は幹也の頭の上から飛び降り、人の形に姿を変える。

「バイバイ幹也、助けてくれて、嬉しかったにや。」

悲しそうに、惜しむように、彼女は笑う。

そして、大天使に向かって歩みを進める――

「いや待てアホ猫。」

直前、襟を掴まれて後ろへと引き戻された。

「にや!?? 何するにや!??」

思わずそう叫ぶ黒歌に、幹也は呆れたように返す。

「いやいや、お前義理堅い猫とか抜かしてたくせに、何一つ恩を返さずに立ち去るつもりか?」

「っ、私が死んで、貴方が生きる!それで貸し借りは無し!それでいいじゃない!!?」

「いや、だからな? 何で俺が生きるのに、お前が死ぬ必要があるんだよ?」

「はあ?」

ここに来て、黒歌はいよいよ幹也の事が分からなくなつた。

一体この少年は何を考えているのか?

熾天使と相對して、勝てるつもりでいるのか。

そんな疑問を無視して、幹也は言い放つ。

「おい、ガブリエル。悪いけど、こいつを渡すつもりは無いから。」

「……正気ですか? 彼女は自らの主人を殺して追放されたはぐれ悪魔。言ってしまえ

ば、超危険人物なのですよ？ 貴方の身にも危険が及ぶかもしれません。ですから」

「…は？」

ガブリエルの言葉を遮るように幹也は問いかける。

「お前は、こいつが罪を犯す瞬間を見たのかと聞いている。」

「いえ……」

「だろうな。見たとしたらそんなありきたりな言葉は出てこねえ。こいつの事を何も知らない証拠だ。糾弾するのはいい。侮蔑するのも勝手にしろ。だがな、こいつの事を何も知らずに断罪する事だけは許さない。」

幹也は刀を抜き放ち、ガブリエルに鋒を向け宣言する。

「あんたがこいつを殺すつてんなら…俺は容赦なくあんたを斬るぞ。」

その言葉に、黒歌は瞠目する。

「にやつ、幹也正気なの？？ 相手は四大天使の一人、天界最高戦力の一角なのよ！！？ いくら幹也でも死んじやうにや…」

「知らねえよ。黒歌、俺はな、一つだけ心に誓った事がある。それは悔いの無いように生きる事だ。ここでお前を渡して生き延びても、俺はきつと後悔する。後悔したまま生きるのなんざ御免だ。だったらここで全力出してこいつを倒した方がまだマシつてもん

だぜ。」

「幹也……」

「それにな、さつきから負ける前提で話してるけどよ……存外、勝ち目も多いかもしれんぞ？」

直後に、幹也の体から莫大な光の奔流が溢れ出す。

『——!!?』

その光景に黒歌だけでなく、ガブリエルも戦慄する。

(何という魔力……いえ、これは、魔力と神気が混じって……!!?)

質、量、共に一級品。ともすれば単体で勢力図を変えかねない程の力。

しかしその発生源たる当人は、

「全盛期の七割ってどこか。まあ、切り札全部使えば勝てるだろ……」

と、やや不満げに呟いていた。

(まだ何かあるというのですか……!!?)

その眩きに戦慄するガブリエル。

しかし彼女として一勢力の最高幹部、その動揺の一切を表情には出さない。

そしてガブリエルは意を決して一つの問いを投げかけた。

「一つだけ、聞いてもよろしいでしょうか？」

「何だよ？」

「仮に彼女が貴方を騙していて、貴方を裏切ったとしたら、貴方はどうしますか？」

その問いに、しかし幹也は一切の迷いもなくこう答えた。

「そんな時は、こいつを殺して俺も死ぬよ。」

『!!?』

黒歌とガブリエルはその答えに目を見開く。

「助けるだの、救うだのには必ず責任が生じる。漫画や小説じゃないんだ、救ったらハイおしまい、って訳にはいかない。最低限救った奴を安心して置ける環境を整える義務がある。さっきの親子も、保護してくれる所があったから放っておいたものの、そんな場所が無かったら、しばらく側についてたくらいだぜ。」

「――」

その答えはガブリエルにとって衝撃だった。

何故ならそれは天界が志す理想の救いの定義そのものだったからだ。

(こんな子供が、何故…)

ガブリエルは疑問に思う。一体どんな人生を送れば、この歳でここまで達観出来るのか、と。

まさか幹也が転生者だとは微塵も思わないガブリエルはそんな事を考えてしまう。

そんな様子を気にせずには幹也は続ける。

「俺は黒歌こいっを信じてる。わずかだが背中を合わせて戦ったからな。だからこいつが本当に道を外していたなら、そんな時は俺が斬る。そして、こいつを信じて野放しにしてしまった俺も腹切つて詫げるよ。責任つてのはそういう物だろう?…だからガブリエル、あんたには渡さない。黒歌を罪人としか見ていない奴に、渡す訳にはいかない。こいつの本当の姿を見ようとしてもしない奴に、こいつを裁かせるたまるかよ——!」

』。』

二人は沈黙した。

一人は少年の背に庇われながら涙を流し、

一人は少年の高潔な在り方に心を打たれて。

そしてガブリエルは一言、こう呟いた。

「美しい…」

「……は?」

予想外の一言に、幹也はそんな間の抜けた声を出してしまう。

そしておもむろに近づいて来たガブリエルの胸元に抱きしめられた。

「むガア?」

「ニヤア?」

幹也と黒歌はまさかの展開に驚愕の声を上げる。

(息が！く、苦しい…)

「私、感動致しました。貴方がどのような人生を送って来たかは判りませんが、その歳でそれだけ達観するという事は、きつと壮絶な人生だったのでしょう。それでも貴方は腐らずにその清く気高い心を保ち続けた。私は貴方に最大の敬意を表します。」

「わ、わかった、わかったから一旦離し…」

「幹也を離すにや！このおっぱいおっぱい!!?」

若干呼吸困難になっている幹也の声を遮りながら近づいてくる黒歌。

しかし、離す気配の無いガブリエルを見ると、黒歌は幹也の後ろから抱きつく。

「んあ!!?」

豊かな双丘に前後から挟まれる形になった幹也。

呼吸が更にきつくなる。

「幹也は私のにや！絶対渡さないにや！」

「縛り付けるのは良くありませんよ？しっかりと彼の意思も尊重しなくては。」

幹也を挟んで言い合う二人に、ついに限界が来た幹也は、自らを挟み込む双丘をがしり、と掴む。

「あつ……」

「にや……」

甘い刺激に声を漏らす二人に対し幹也は、

「いい加減にしろよ？な？」

静かに怒りを込めた声で二人竦ませる。

『はい……』

後に二人はこう語る。あの目は本気だった…と。

さて、熾天使との激突という神話さながらの戦いは回避できたものの、問題はまだまだ残っている。

黒歌の指名手配の事だ。

それをガブリエルに話すと、柔らかな笑みで、

「私が魔王に頼んでおきましょう。」

と言った。

「……はあ？」

その言葉に思わず首をかしげる幹也。

「え、いや待て、なんで天使と魔王が知り合いなんだ？」

「そうですね…それについてはまず先の大戦について話さなくてはなりません。」

「続けてくれ。」

「はい。今よりおよそ数百年前、天使、悪魔、そして堕天使の三大勢力は永きに渡り戦争を行なっておりまして。ですが、全ての者たちが戦争について賛同していたかといえば、それは違います。中には望まない戦いをしていた者も多くおりました。そして大戦は三大勢力の衰退という形で、停戦になったのです。そしてその大戦で戦争推進派の多くが死に絶え、戦争反対派が勢力のトップに就きました。現魔王と、天界のトップ、堕天使の総督ですね。今の各勢力のトップは、昔馴染みのような関係なのです。だからこそ停戦が成立した、という見方も出来ますね。」

「なるほど…大体わかった。それならなんとか…」

「いや、多分無理だにや。」

幹也の安堵を、黒歌は否定した。

「いかなる事情があれ、私が主人を殺したのは事実だにや、無罪放免とはいかない…」

暗く、沈んだ声に幹也は、

「まあ、そりやそうだな。」

と、軽く返す。

その返しに、黒歌は更に暗くなるが、

「けど、むしろそっちの方が都合が良い。」

そう続けた。

その言葉に、黒歌は顔を上げる。

「にや？それってどういう…」

「言葉通りの意味さ。ガブリエル、三大勢力のトップの性格を教えてください。上手くいけ

ば——」

幹也はそこで不敵に笑って、

「全部解決するかもしれん。」

そう告げるのだった。

# 交渉戦 前編

冥界。

悪魔の住む世界であるそこは、実はあまり人間の都市部と大差は無い。

これは現四大魔王が人間の文化に肯定的であり、感銘を受けているからである。

領地や爵位などの古風な文化は未だ廃れてはいないが、しかし新たな物を拒絶しない寛容、或いは自由といったような魔王の気質があらわれていた。

「ふう……」

そんな冥界にある執務室で、紅髪の青年は書類仕事を終えて一息をついていた。

青年……にしか見えないが、その紅髪の青年こそ四大魔王の一人にして現魔王のリーダー的な存在である。

「サーゼクス様、お疲れの様ですね。」

「ああ、グレイフィア、やっと書類の整理が終わってね。一息ついていた所なんだ。」

サーゼクス、と呼ばれた青年は執務室に紅茶を持って入ってきたメイド、グレイフィアに疲れた様な笑みを向ける。

「大変、ですね。」

「ああ。けど、サボるわけには行かないさ。現状では停戦となっているが、一触即発には変わりがない。だからこそ、勢力内部の『洗浄』と他勢力とのパイプ作りを徹底しなくてはならないからね。」

「サーゼクス様、どうかご無理はなさらないようにして下さい。」

「わかってはいるよ、グレイファイア。ところで、今は二人きりなんだし、様付けは無しでも良いんじゃないかい?」

「公私は分けていますので。」

「うう…僕の嫁はしつかり者だけど厳しいなあ…」

「何か?」

「なんでもありません。」

魔王とメイド、という立場であっても、嫁には頭が上がらないサーゼクスだった。

そんな時、サーゼクスの前に一つの通信型魔方陣が浮かび上がる。

「ん?これは…」

魔方陣から立体映像が浮かび上がる。そこには

「ガブリエル?」

「ええ、お久しぶりですね、サーゼクス、それにグレイファイアも。」

柔和な笑みを浮かべる、ガブリエルだった。

「お久しぶりです、ガブリエル様。」

「久しぶりだね、ガブリエル。」

「ええ、相変わらずグレイフィアには頭が上がりたくないようね、サーゼクス。」

それにグレイフィア、私達は友人なのだから敬称は不要よ?」

「そうはいきません、ガブリエル様。貴方程の方がわざわざ直通の魔方陣を使って来たのです。何か重要な事があるのでしょうか?」

「ふむ、確かに言われてみれば…何かあったのかい?ガブリエル。」

「はい。では、本題に入りましょう、SS級はぐれ悪魔、黒歌についてです。」

柔和な笑みを消し、そう告げるガブリエルに、場の空気が変わる。

「続けてくれ。」

「はい…と言っても、これは私の口より、本人に直接話してもらった方がよろしいですね。」

「本人?」

「ええ、黒歌の身柄を確保した『人間』に。」

「!!?」

ガブリエルの言葉に思わず息を呑む二人。

「今彼女はなんと言った？はぐれ悪魔の中でも最大級の危険度を誇るSS級の悪魔を人間が捕らえた？」

「冗談を言っている様子では無いし、何より彼女はそんな冗談を好まない。」

「思わず身構える二人は、魔方陣に映った人物を見て、更に驚愕する。」

「子供……?」

「お初にお目にかかります、魔王サーゼクス・ルシファー殿。」

「目の前の十歳程の少年は、その年齢に沿わない恭しい態度で頭を下げる。」

「私は月野幹也。今回、はぐれ悪魔である黒歌を捕獲した者でございます。」

「……あ、ああ、失敬、少々取り乱してしまつたみたいだ。」

「構いません、自分の容姿は把握しておりますから。」

「そうか……」

「合わない。あまりにも目の前の少年は大人びている。しかしこれ以上動揺しては魔王の名折れ、そして目の前の少年に失礼だと考え、気を取り直す。」

「それで、話というのは？」

「はい、今回、お話したいのは、黒歌の処遇についてです。」

「処遇……」

「はい。主人殺しは悪魔の中では大罪。死刑が常と聞いております。ですが、そこには

一切の情状酌量の余地は無いのでしようか？」

「とうとうと？」

「自衛、或いは近親者の為に殺さざるを得なかった場合はどうなるのか……？という事です。」

「!?？まさか彼女は……!?？」

聞き返すサーゼクスに、幹也はしっかりと頷き、

「詳しい事は未だ聞いておりませんが、彼女いわく、自らの主人が非道な行いをして来たので、そうするしか方法が無かった……と言っております。それも一度や二度では無く、日常的にだそうです。」

「……………」

その言葉に、サーゼクスは沈黙する。

しばらく考えたのちサーゼクスは再び口を開いた。

「彼女が嘘を言っている……とは考えなかったのかい？」

「その可能性を消す為に、サーゼクス殿に連絡を取らせて頂きました。」

「成る程……証拠を探して欲しい……と。」

「はい。」

「仮に……本当に仮にだが、証拠が見つからずに黒歌の処刑が決定したら……君はどうする

？仮にも悪魔…魔王に頼み事をしたんだ、対価は払わなくてはならないよ？」

我ながら意地の悪い質問だ、と、サーゼクスは内心吐き捨てる。どれだけ大人びていようと子供に話す内容では無いし、こんな事を言っても明確な返答などある筈が…

「その時は、この命を対価として差し出します。」

「——！」

今度こそ、サーゼクスは完全に意表を突かれた。

目の前の少年は何の躊躇いもなく自らの命を対価として差し出すといったのだ。

これには冷静なグレイフィアも目を見開いている。

「本気で言っているのかい？」

「はい。」

絞り出すような問いに、淡々と即答する幹也。

「それに私自身、黒歌を捕縛する際、討伐に來た悪魔を攻撃してしまったので、命を差し出すのは妥当なものでは無いかと。」

「何故攻撃を？」

「暴漢が迫っているようにしか見えなかったのです。」

「成る程…」

あつさりと納得するサーゼクス。

事実、悪魔の中には、そういった下劣な悪魔も存在することを認識していたからである。

もつとも、容認したわけでは無いが。

「わかった。すぐに捜査に取り掛かるとしよう。」

「お願いします、サーゼクス。」

「任せてくれ。グレイフィア、頼む。」

「承知致しました。」

指示を受けたグレイフィアは即答に魔方陣を使い転移していった。

(さて……取り敢えずは予定通りだな。)

その様子を見ていた幹也は内心息を吐く。

実の所、この状況に持ち込めた段階で幹也の交渉における勝利は確定したも同然だった。

本当に魔王がガブリエルの話す通りの性格なら、確実に上手くいく。

それがガブリエルからサーゼクスの話を聞いた幹也の所感だった。

人間への友好的なスタンス。

差別をしない公平さ。

そして統治者たる思考の速さ。

それらを本当に兼ね備えているならば、必ず気付く。この交渉における最善の落とし所と、最悪のシナリオに。

サーゼクスは思考する。この交渉の結末を。

(証拠はグレイフィアに任せておけば問題は無い：彼女なら不正もせず必ず結果を出す……結果?)

結果。

その言葉には、良くも悪くも、という枕言葉がつく事にサーゼクスは気付いた。

(結果……それはどんな結果だ?それによってこの交渉は左右されると言っても過言では無い。なら、どんな結果なら最善を選び取れる?)

サーゼクスの頭に幾つかの選択肢が浮かび上がる。

(一番可能性が高く、同時に最高のシナリオは証拠が見つかるという事だ。感情の機微に聡いガブリエルの目をそう簡単にごまかせるとは思えない。仮にごまかせたとしても、嘘を見抜く為の魔法術式が存在する以上、必ず真実が明かされる。)

最も、そういった審問用の術式を使える悪魔は限られているが。

(仮に黒歌が嘘をついていたとしても、これで解決する。何より嘘ならば証拠が見つからない。存在しないのだから……)

そう、ガブリエルの目を抜けたとしても、結局捜査の手が入った以上、誤魔化すという選択肢はそもそも存在しないのだ。

(大丈夫だ……それに、あの少年の命だつて受け取らなくて済む。黒歌を捕縛したという実績を盾にすればいい。彼と交戦した悪魔には私から話をつける。それで——)

ふと、ここまで考えて、サーゼクスは何かを見落とした感覚に襲われる。

(何だ？何かを見落としてる？何か重大な見落としが……)  
もう一度サーゼクスは自らの考えを反芻する。

しかし、何処にも見落としなど——

(あ。)

あつた。一つだけ。

最悪の展開が。

(気付いたな。)

サーゼクスの顔色が変わるのを見て、幹也は気付いたと確信した。

ここで改めておさらいしよう。

仮に証拠が見つからなかったとして。

黒歌が嘘をついていたならばそれはそのまま悪魔の法に基づき罰を受ける。

しかし証拠が見つかったなら、黒歌の言ったことが真実だった事になり、黒歌の罪は、軽減され、監視はつくだろうが、実質無罪と変わらなくなる。

じゃあ、仮に。

本当に仮に。

黒歌が――、

（黒歌が真実を言っていたのに証拠が見つからなかった時は、一体どうなる……!?）

それはサーゼクスが考えついた最悪の可能性。

（つあ、駄目だ、それは駄目だ！もしそうなれば、SS級はぐれ悪魔だった黒歌や、人間差別をしている悪魔への発言力を持たない彼は真っ先に殺される！）

仮に今サーゼクスが幹也だけを見逃しても、何のお咎めも無しでは確実に報復され、同時にサーゼクスの能力を疑われて、制御出来ない状態に陥る。

そうなれば、内戦という形で今度こそ悪魔は滅びるだろう。

嘘を見抜く術式を使って黒歌の言葉が真実だと証明されたとしても、肝心の物証が無ければ、その結果の効力も弱くなる。

そうなるとうなるか。最悪の場合

(何の罪もない者が二人も死ぬ！しかも一人は子供だ！)

魔王として、何よりサーゼクスという一人の男として、それだけは絶対に避けたいシナリオだった。

更にガブリエルの存在が事態をより深刻化させる。

仮にガブリエルを押し切って二人の身柄を抑え、処罰を強行した場合、ガブリエルだけでなく、天界の幹部から疑念を向けられる。もしそうなれば

(兼ねてから考えていた三大勢力の和平が難しくなる！いや、不可能と言っても良いだろう、それだけ彼らの人間への思いは大きいのだから……！)

額から汗を流すサーゼクスを見た幹也は勝ちを確信した。

サーゼクスが最悪の可能性に気付いた時にどうなるか。

幹也はそこまで計算していたのだ。

(……)まで考えれば必ず手は抜かない。もし証拠が見つからなかったとしても、無罪の者を裁くのはサーゼクスという個人は許さない。ならどうするか？答えは簡単だ……魔王という立場に縛られてもできる措置は……)

サーゼクスもまた、その思考にたどり着く。

(妥協案。SS級はぐれ悪魔と、それを捕縛できるその戦力を利用する……という名目で

彼らを生かす！それしかない！」

と、そこまで気付いた時に、執務室に魔方陣が現れる。

「戻りました、サーゼクス様。」

「どうだった？」

その場に居た全員が息を呑んで返答を待つ。

そして。

「クロです。黒歌の主人、およびそれに加担した貴族の家から、多くの不正の証拠を確認しました。」

『！』

それを聞いたサーゼクスとガブリエル。そして幹也から安堵の息が溢れる。

「そうか……ありがとうグレイフィア。少し休んでくれ。さて、幹也君だったね？」

「はい。」

「黒歌の無罪は証明された。これで解決——」

「ちよつと待つて欲しいですよ。」

全てがひと段落、それに待ったをかけた人物が居た。

それは他ならぬ黒歌本人であった。

「魔王様、お願いがありますにや。」

「なんだい？」

「私を主人殺しの罰として、幹也の使い魔になる事を許可して欲しいですよ！」

「…はあ？？」

驚いたのは幹也だ。

何故なら事前の打ち合わせではこんな事は話し合っただけで居なかつたのだから。

「おまえ、何を言ってる…」

「今後を考えると、こっちの方が都合が良いでしょ？」

「それは…」

「今後？」

サーゼクスは二人の会話の内容に首を傾げる。

「今後とは、どういう事だい？」

「えーと…」

暫く考え、意を決したように口を開く。

「実は魔王様にお願いがございまして…」

「お願いとは？」

「その、今回の件で交戦した悪魔に今後目をつけられるかもしれませんが。私個人ならやりようはいくらでもあるのですが、私は孤児院に住んでおりまして…」

「孤児院が報復として襲撃されるかもしれない…と?」

「はい。ですので、魔王様には孤児院を守って頂きたく思っています。」

「成る程…」

「勿論、対価は払います。」

「具体的には何を払うつもりだい?」

「戦力。」

それは、サーゼクスにとっては予想外だったらしく、思わず口を開けて驚いていた。

(…ひよつとして、この交渉の最善の結末に気付いてなかったのか?)

そう考え、幹也はサーゼクスをかなりのお人好しだと思った。

今回の交渉における最善とは何か?

早い話がギブアンドテイクの関係を構築する事である。

幹也が対価を払い要求を通す。

サーゼクスが対価を受け取り、要求を聞き受ける。

対価と要求が同数でなくとも大きな対価を一つ払う事で、いくつかの要求で釣り合いを取るという関係を成り立たせるといふ事が幹也の狙いだったのだ。

きちんと悪魔のルールに則った取引なので、他の勢力や内部の悪魔にとやかく言われる事の無い関係なのだ。

「成る程…」

サーゼクスは幹也の対価を聞いて頷く。

「無論、それだけではありません。」

「とうとう?」

「和平交渉の補助と、内部の悪魔への牽制。簡単に言えば、フットワークの軽さを活かして他の勢力へのコネを作り、それらの実績を持つて、魔王に対して不信心を持つ内部勢力へのポーズにします。」

その提案は、まさしくサーゼクスが現在抱えている問題を解決するものであった。

「では改めまして、こちらの要求は孤児院の保護と、私が生活出来る環境の確保。はぐれ悪魔への討伐権。そして…黒歌を使い魔として私の補助をもらう事。」

「幹也…」

本当に嬉しそうに幹也を見る黒歌。その頬はわずかに赤みを帯びていた。

「対して、払う対価は三大勢力、および必要に応じた他勢力への交渉の為の材料、および実績の獲得と、悪魔勢力、並びに和平がなった際の三大勢力への助力。…こんな所ですかね。」

さて、と、幹也はサーゼクスを真つ直ぐに見据える。

「魔王様。返答は如何に?」

その言葉に、サーゼクスは笑う。

「断る理由が無い。是非、契約させていただけよう。」

「では、契約成立ですね？魔王様。」

「ああ。それと、私の事はサーゼクスで構わないよ、幹也君。君の要求は可及的速やかに叶えるでしょう。だが、場合によってはその街から引越してしまいかもしれないが……」

「問題ありません。」

「わかった。後ほどまた連絡する。どうかゆっくり休んでくれ。」

そう言つて、サーゼクスは通信を切った。

「ふう……」

椅子にもたれかかり、息をつくサーゼクス。

「お疲れ様です。サーゼクス様。」

「ありがとうグレイフィア。にしてもすごかったな……あの子は。あの交渉全てが彼の手の内だと思うとゾツとするよ。」

「ええ、ですが……」

「ああ。同時にあれほど頼もしい味方はいない。今回の交渉はとても身になったと言える。悪魔にとつても、他の勢力にとつてもね。」

そう言つて、サーゼクスは少し笑う。

それは魔王では無く、サーゼクスという一人の男の笑み。

「月野幹也君、か…」

面白くなりそうだとサーゼクスは独りごちた。

一方その頃、幹也またぐったりとしていた。

「あーしんどい。」

「お疲れ様です。」

「お疲れにや。」

「あいよ。というか黒歌、ああいうのは事前に言つといてくれよ。びつくりしただろ？」

「ごめんにや。」

ニコニコと笑いながら謝られては幹也もそれ以上何も言えなかつた。

「んじや、もう一軒行つとくか。」

そう言つと幹也は立ち上がり、ガブリエルに通信魔方陣の準備を頼む。

「まだどこかに交渉するのですか？」

「ああ、こういうのはサクサク済ませた方が良くからな。」

「次は天界に？」

「いや。」

幹也は首を鳴らした後、答えを告げる。

「墮天使領。総督アザゼルと話をつける。」

交渉戦、第二ラウンド、開始。

## 交渉戦 後編

墮天使領。

そこは一つの組織が治める場所。

その組織の名は神の子を見張る者

墮天使アザゼルが総督を務める組織だった。

そんな彼は今現在凄まじい冷や汗と共に執務室の魔方阵に向き合っていた。

(何でだよ…何でガブリエルから直通の連絡魔方阵が…!!?)

無視するべきか。

そんな事をしたら恐らく自分は恐ろしい目に合う。

しかし、応答したらしたで何が起こるかわからない。

しばしの逡巡の後、アザゼルは魔方阵に応答する。

「俺だ。」

「俺だ。ではありません。出るのが遅いです。」

開口一番凄まじい程の冷気を伴った声を発するガブリエル。

「悪かったよ。そんで、今日はどうしたんだ。」

そんなガブリエルに、あくまで飄々に対応するアザゼル。

「はあ…まあいいです。実は、姫島の一件で話があります。」

「!?？」

姫島。その言葉にアザゼルの顔色が変わる。

「先程、姫島——バラキエルの家族が襲撃を受けたのはご存知ですね？」

「ああ、さつきバラキエルから連絡が来てな。母娘共に無事だと聞いたが…まさかお前が？」

「半分、違います。」

「半分?」

「はい。私が来た時には、別の人間が襲撃者を撃退していました。——彼です。」

「初めまして、墮天使総督殿。」

「子供…!?？」

「見た目で判断してはだめですよアザゼル。彼の實力は、現段階で私より上です。」

「はあ!?？」

ガブリエルの言葉に、信じられない、と顔をひきつらせるアザゼル。

しかしすぐに頭を切り替え、幹也に向き合う。

「そうか…お前が助けてくれたのか。感謝するぜ。バラキエルの家族は俺にとっても大

切なんだ。本当にありがとう。」

イメージと違うアザゼルの対応に、思わず面食らう幹也。

「いえ…自分は気づけば勝手に動いていただけなので。」

「それでもだ。何か礼をさせちゃくれねえか？」

「……では一つお願いが。」

「言ってくれ。」

「三大勢力の和平を、円滑に進めるために協力して頂きたい。」

「何故お前がそれを…」

「実はさっき、魔王サーゼクスと取引をしたのです。いくつかの行動を許してもらう代

わりに、和平に協力する、と。」

うへえ、と、顔を顰めるアザゼル。

（この歳で魔王と取引とは…どんだけ肝が据わってるんだよ、ったく）

内心で溜息を吐きながらアザゼルは幹也に問う。

「それで？ 具体的には何を要求するつもりだ？」

「早期に問題の芽を摘む権限…ですかね。」

「……要するに、肅清権限か。」

「いかにも。通常の問題ならそちらに一任しますが、三大勢力全てに関わる状態になっ

た場合はその戦犯を始末、もしくは捕縛する許可を頂きたい。」

物騒な言葉が飛び交ってはいるが、これは実の所当たり前の要求だったりする。

ここでしつかりとした確約を貰わなければ、後々外交問題に発展しかねないからだ。

そしてこれは、和平を望む墮天使にとっては極めて有難い提案でもある。何故なら

(三大勢力の中で一番信用の薄い墮天使が、この肅清を許可すれば、下手に勘ぐりを入れる輩はいなくなる。痛くもない腹を探られる事も無くなる、か。中々どうして、考えてるな。)

この提案の意味を正しく理解したアザゼルは思わず舌を巻く。

本当に目の前にいるのは、子供なのかと疑いたくなる程に。

しばらく考え、アザゼルは口を開いた。

「条件がある。」

「何です?」

「その墮天使が、どんな事件を起こしたか、しつかりと教えて欲しい。独断で下手に殺されちゃたまらんからな。」

「構いません。但し、緊急の時には…」

「構わねえ。そんな時は任せるぜ。」

「では…交渉は成立で? 総督殿。」

「ああ。それと、アザゼルで構わねえよ。敬語もいらん。」

「ですが…」

「堅いのは苦手なんだ。気楽に行こうや。」

「…わかった。俺の事は幹也で良い。」

「わかった。よろしくたのむぜ？幹也」

こうして、墮天使との交渉は成功に終わったのだった。

と、そこでアザゼルがある疑問を口にした。

「所で、お前さんの神セイクリッドギア器はなんなんだ？」

それはガブリエルや黒歌も気になる事だった。

およそ十歳程の少年が大天使を凌ぐ程の実力を有する事が出来る程の神器とは一体何なのか？

研究者としてアザゼルは何としても聞きたかったのだ。

しかし、幹也の反応は

「せい、セイク、なんだそりゃ？」

「「は？」」

思わず、幹也以外の三人がぼかんと口を開ける。

「幹也？ 貴方のあの刀は神器では無いのですか？」

「ん？ ああ、これか？」

言つて、幹也は手元に黒刀を召喚する。

「これは神器じゃねえよ。宝具っていう、神秘の塊なんだ。」

「宝具…ですか？」

聞きなれない言葉に、三人は首を傾げた。

「そう。神刀つきがみ月神。唯一無二の俺の宝具だ。」

「神刀だと…!?？」

アザゼルはその言葉に息を呑む。

恐らくは聖剣と同等か、或いは凌駕しうる程の刀。

それはアザゼルの研究意欲を激しく刺激した。

「なあ、時間があればその刀を」

調べさせてくれ。

そう言おうとした時、それは来た。

「ミキヤ君!!？」

いきなり飛び込んで来た幼い声。

それは、

「あら、朱乃ちゃん？」

先程幹也が助けた少女、姫島朱乃の声だった。

それから。

泣きながら礼を言ってくるゴツい墮天使（バラキエル）と、幹也に会わせろと暴れ出す朱乃をなんとか宥め、通信を切る幹也。

「あー。マジで疲れた…」

「にやー、次は天使かにやー？」

「いや。そつちはガブリエルが話をつけてくれるそうだ。」

と、一息ついていたら、再び通信用の魔方陣が現れた。

「サーゼクス殿？」

「度々済まないね、幹也君。早速君に頼みがある。実は、私の妹がある町の領主になるの

だが、君には妹を陰ながら支えて欲しい。」

「妹…ですか？」

「ああ。もう直ぐ中学生になる。名をリアス・グレモリー。」

「…陰ながら、という事は、やはり？」

「ああ。君の存在は三大勢力のトップと、ごく僅かな幹部にしか伝えていない。公にするには、まだ早いと思ってるね。」

「構いません。むしろこちらから頼もうと思っただけなんです。」

それで、その町は何処なんです？」

その問いに、サーゼクスははつきりと答えた。

「駒王町。試験的に、悪魔が運営する学校を設立した場所だ。」

静かに、そしてゆっくりと、しかし確実に。

---

物語は動き出した。

# ステータス

原作開始時のステータス。

つぎのみきや  
月野幹也

性別 男

年齢 十七歳（前世の 享年 二十歳 ）

容姿 コードブレイカーの大神君をマイルドにした感じ

性格 基本的には淡泊かつ冷淡。しかし同時に情に熱い男でもある。尚、一度死を体験している為、達観している。

ステータス

筋力 A (A+)

耐久 B (B)

敏捷 A+ (A++)

魔力 | |

精神 B

幸運 D |

スキル

直感 B

戦闘における第六感。戦い中での、最適な流れを読み取るスキル。

気配遮断 B

気配を断つスキル。Bランクともなれば並みの達人ですら探知出来ない。

魔力放出(斬)

魔力を放出するスキル。但し幹也の場合は斬撃を飛ばすという要領でしか使えない。射程距離は本人の技量によって変動する。

月の神性 B+

いつの間にか身についていたもの。幹也の魂の大半は人間では無く、神霊になっていく。恐らくはツクヨミとの長い修行の中で神気に魂のまま触れ続けた影響が現れたものと考えられる。これにより幹也は、月の特性(満ちて欠け、欠けて満ちる)を自在に操ることが出来るようになった。具体的には通常よりも遥かに早い再生能力と魔力回復(実質無尽蔵の魔力)に加え、宝具と通常攻撃に補正がつくようになった。また代謝等にも影響する為、人間とは比べ物にならない寿命、それこそ、悪魔に匹敵する程の命を手に入れた。

サーヴァント適正

セイバー、アサシン、  
 ■■■■

あくまで適正止まりなのは、英霊としての召喚では無く、受肉と同じ理屈での転生だからである。

これだけの高いステータスを狂化の呪いや知名度の補正無しに保有しているのは、英霊という『粹』に押し込められていないからである。

『座』への記録や、冠位指定こそされていないもののその戦闘力は、大英雄にさえ匹敵する。

宝具

第一宝具

夜光・月神  
やこう・つきがみ

ツクヨミが幹也の為だけに鍛えた刀。

地球に降り注ぐ星の光を魔力へ変換、収束し、斬撃として放つ宝具。

ランクはA++

第二宝具

宵ノ羽衣  
よいのほころも

ツクヨミが幹也の為だけに編んだもの。羽衣と謳っているが、見た目は黒いロングコートである。身に纏うだけで身体能力にプラス補正が付き、所持しているだけでもかなりの防御効果を発揮する。

但しこれにより、幹也の対魔力スキルは失われてしまっている。(宝具と統合された為。) 宝具ランクはB++

### 第三宝具

月 ■ ■ ■ ■ ■ 者

あつてはならない宝具。

番外の ■ ■ 罪

■ ■ ■ ■ ■ と ■ ■ ■ ■ ■ から強引に魔力を引きずり出す事で規格外の出力を可能にする。

これの使用には条件があり、

■ ■ ■ ■ ■ 悪、或いはそれに匹敵する者が現れた時にのみ使う事が出来る。

毒を持って毒を制す。

たとえ同じ底まで堕ちたとしても。

---

この身は、星の碑文の為に。

# 原作開始 旧校舎のディアボロス 秒読み

いつからだったか。孤独を恐れたのは。

いつからだったか。孤独を拒んだのは。

いつからだったか。孤独を嫌ったのは。

いつからだったか。孤独を憎んだのは。

かつて、人を救う為に戦争を望んだ賢者がいた。

かつて、人を救う為に神を目指した魔性がいた。

かつて、人を救う為に奇跡を渴望した男がいた。

目的は違えど、その根底にあるのは救済だった。

人を愛すが故に人を作り変える女神も、

人を愛すが故に人理を焼却する魔神も、

どれもこれも皆、ひとえに自らの中にある愛情に従ったからこそその行動だった。

であればきつと、これもまた人への愛なのだろう。

だってこんなにも、私は人を——愛している。

通学路というのは何故こんなにも賑わっているのか、幹也は真剣に考えた事がある。人が多いからか。はたまた若さくる活力か。

何れにしても精神年齢三十オーバーの高校二年生である月野幹也はさすがに朝早くから元気にはしやげる程のバイタリテイは持ち合わせていないのである。

(ほんと、色々あつたなあ…)

魔王サーゼクスに駒王町に赴けと言われ、早七年。

あれから大した事件も起こらず、幹也はさして苦勞もせずに駒王学園に入学した。(今更高校で何学べって言うんだよ…)

だらだらと、幹也が歩いていると後ろから何かがぶつかってくる。

同時に、ふにゆり、と柔らかな感触も。

(もう追いついてきたのか……)

「置いてくなんてひどいですわ？ 幹也君？」

きつと、彼女を見たら百人が百人とも、大和撫子のようにだと答えるであろう美貌。豊満に育った魅力的な肉体美。

「いきなり抱きつかないで下さい……朱乃さん。」

そう。彼女はかつて幹也が助けた少女、姫島朱乃だった。

時間が経つと人は変わるとは言うが、幾ら何でも育ち過ぎだと幹也は息を吐く。

しかし、当の本人である朱乃はそんな幹也の様子を気にせず後ろからべったりと抱きついている。

「だって……私を置いて出て行ってしまふんですもの……これくらいは許して貰いますわ？」

「……………」

毎度の事ながら、幹也は朱乃の行動力に驚かされていた。

この町に越してきた時も、幹也の家にいきなり現れ、

『今日から私も住む!!?』

という衝撃的な宣言から始まり、風呂場やベッドに潜入、果ては中学校の時には、

『幹也君…子供は何人欲しい?』

と、人目を憚らずに聞いてくる為に周りからは嫉妬や好奇の目を向けられたりする。  
(まあ…高校に入ってから減ったけどな。)

周りが理解した、という訳ではない。幹也よりも更に目を惹く存在が現れたからである。

と、そこまで考えた時、抱きつく力が更に強くなる。

「幹也君…? これでも私、怒ってますのよ?」

「…すいません、考え事をしてたらつい朱乃さんを忘れて家を出てつらつ!? すいませんマジで謝るんで微弱な電気流すのはやめて!?!」

父親譲りの電撃を流されそうになり、幹也は本気で焦る。

ダメーじは通らないが、傍目から見ると電撃を体から発する謎の超常人間だと思われるてしまうのが嫌だったのだ。

「むう…まあいいですわ。その代わりに、ちゃんと埋め合わせはして貰いますわよ?」

「了解いたしました…」

何とか暴君を引き剥がす事に成功した幹也。

と、そこで幹也は、いつの間にか自分達が学園の目の前までやって来たことに気付く。  
「相変わらず広い学校だよなあ…」

駒王学園。

高校と大学が一纏めになったその学園は、さながら西洋の学舎のような優雅さを感じさせる作りとなっている。

「んじゃ、朱乃さん、また後で。」

「嫌ですわ。」

「え？」

「嫌ですわ。」

「いや、あの」

「私も二年の教室に行きますわ。」

「……………」

結局、朱乃を説得するのに五分もかかった。

（疲れた…）

朝から魔王と渡り合う程の交渉術をフルで発揮した幹也。

最終的に膝枕を帰ったらするという事で落ち着いた。

「ん？」

教室に入つてすぐに、人だかりが出来ていることに気が付く。

見れば、女子生徒が皆、一人の男子に群がるように集まっている。

(またか……)

これが幹也への視線が減つた理由。

幹也を遥かに上回る程の好奇と嫉妬が彼に集まつたのだ。

(確か……兵藤 一誠、だったか。)

しかし、彼に大して興味の無い幹也は、さして気には留めなかつた。

---

全てが始まるまで、後二日。

## 事件前夜

愛している。けれどこの言葉をそのまま額面通りに受け取る人間はきつと少ない。だつて人間は究極的には一人なのだから。

どれだけ群れようと、どれだけ人と関わろうと、どれだけ他者を受け入れようと。人は結局、『個人』という枠組みから脱する事など出来はしないのだから。

学校から帰った幹也は、朱乃に膝枕をしていた。

「……」

「ふふ、幹也君の膝枕……」

今朝の不機嫌な様子は何処へやら。

朱乃は満足そうに幹也の膝を堪能していた。

(まあ、喜んでくれるならいいか……)

とりあえず電撃は避けられたという事実胸を撫で下ろしていると、黒い着物を大胆に着崩した女性、黒歌がアイスを片手に二階から降りてくる。

「あ！朱乃ばかりずるいにゃ！私にもするにゃ幹也!!？」

「構わないけど、それ俺が買ったアイスじゃね？」

「知らんにゃ。」

「お前……」

三人が騒いでいると、台所からエプロン姿のガブリエルが出てくる。

「三人ともはしたないですよ？年頃の男女がそんなにくつついてはいけません。ちゃんと順序を踏まえないとダメです！あ、幹也君、後で私にも膝枕、お願いします。」

「説得力って知ってるか？」

欲望ダダ漏れに大天使。

一体何故墮天しないのか不思議に思う幹也だった。

しばらくして、幹也が自室でくつろいでいると、通信用の魔方陣が浮かび上がる。

数は三。

それはつまり——

「珍しいな、三大勢力のトップが揃い踏みとは。」

『ええ、お久しぶりですね、幹也君。』

『悪いな、くつろいでいる所に。』

『どうしても伝えなくてはいけない事があつてね。』

そこに映し出されたのは、天使、墮天使、悪魔の長。

金色の翼を生やした、青年にしか見えない大天使、ミカエル。

墮天使の総督である、アザゼル。

紅髪の魔王、サーゼクスの三人だった。

「俺に話が回って来たって事は、それなりに緊急って事か？」

その問いに、サーゼクスが頷き、残る二人は、苦い顔をする。

「…一体何が？」

二人の表情から只事では無いと感じた幹也は先を促す。

『実は、駒王町にはぐれ墮天使が潜入した。』

「！」

サーゼクスの言葉に眉を顰める幹也。

「目的は？」

『現状では不明。だが、恐らくあまり良いものではないのは確かだ。』

幹也はアザゼルが顔色を変えた理由を察するが、あえて口にはしなかった。

「…ミカエル、あんたまでそんな顔をするのはなんでなんだ？」

『………実は、はぐれ墮天使の側に、追放されたエクソシストとシスターがいると連絡が入りました。』

成る程、と幹也は頷く。

『すまねえ。これは完璧に俺達の監督不行き届きだ。』

『面目次第ありません…』

二人はそう言って頭を下げる。

『二人とも、今は頭を上げてくれ。幹也君が困っているだろう？……さて、幹也君、君の任務は』

「潜入した墮天使とエクソシスト、シスターの排除、もしくは捕縛だな？」

『その事なのですが…シスターの方は保護をして頂けませんか？』

「？構わないが…何でだ。」

『おそらく彼女は、騙されているのだと思います。彼女は悪業などを忌み嫌うシスターでしたから。』

「なんで追放されたんだ？」

『……悪魔を治療した為だと聞いています。』

「……………早く和平を結ばないとな。」

その言葉に、三人はしっかりと頷いた。

翌日、学校が終わり、朱乃と二人で幹也は帰路へついていた。

「はぐれ墮天使……」

「ああ、だから、今日からまたしばらく夜は家を空けると思う。」

「……まだ私達を連れて行ってくれないのですかね？」

「ああ、万が一の為に、三人には後方支援に回って欲しい。」

「わかりましたわ。けど……」

「わかってる。いざという時には、三人をしっかりと頼るから、安心して欲しい。」

その言葉に、朱乃は力強く頷くのだった。

（さて、こいつは長丁場になるかもな……）

そう予想する幹也。

しかし、翌日、事態は急転する事を、この時幹也はまだ知らなかった。

——  
すべてが始まるまで、後一日。

## 青

個人、更に細かく言うのであれば、他者と自分だ。

人という生き物を更に区切る最小単位。

生き物が生き物でいる証明。

———けれど、果たしてそれは本当に必要なのか？

その隔たりは、その境界は、人類にとって必要不可欠なのか？

人格という個人の自我は必要だろう。それを無くせば、人類は量産品に成り下がる。けれど、肉体という器は、果たして本当に必要だろうか？

夜の闇を、影が走る。

薄暗い森の中で、黒が跳躍する。

それは、人の形をしていた。

他ならぬ、幹也である。

現在幹也は、気配遮断を使い、ロングコートにしか見えない宝具、宵ノ羽衣を纏いながら木々の間を駆け抜けていた。

(クソ…!!? 迂闊だった!!?)

フードを深く被りながら、幹也は齒噛みする。

今からおよそ数十分前、森の中の廃教会から異様な魔力を感じ取った幹也は現場へと急行したのだ。

通常であれば、迅速な行動ではあるのだが、今回に限っては事情が違った。

(クソツッ…まさかこんなあからさまな場所を根城にするとは、思ってもみなかったぜ…！)

下手に考え過ぎた、と幹也は後悔したが、すぐさまそれを押し殺し、更に速度を上げる。

(幸いにもまだ魔力の動きは穏やかだ。多分何らかの術式を発動しようとしてるんだろうが…)

このペースならまだ間に合う。

そこまで思考が及んだ時、唐突に、あまりにも不自然に魔力の動きが、消えた。

(何だ!? 術式が発動した…いや、途中で妨害されたのか!)

考えられるとすれば、サーゼクスの妹であるリアス・グレモリーとその眷属なのだろうが、

(おかしい…気配の数が噛み合わない。事前の話じゃリアス・グレモリーを含めても三人だった筈だ。けれど感じる気配は五…しかも二つはかなりデカイ。悪魔に成り立てとは到底…)

そこで幹也は、思考を切る。

気配の一つが、幹也の方へ近づいてきたのだ。それも凄まじい速度で。

(この動き、明らかに俺に気付いてる!?)

幹也は急いでその場から離れようとするが、相手の方がわずかに早かった。

猛スピードで突っ込んできたそれは、一言で言うならば青だった。

腰まで伸ばした水色の髪に、青を基調としたジーンズと長袖のシャツ。

男性的な衣装の下から、自己主張する双丘が彼女の性別を物語る。

「何者でしょうか?」

凜とした声に、整った顔立ち。しかしその表情は、氷の様に冷たい。

「……この先にいる堕天使を倒しに来た。気配から察するに、あんた悪魔だろ? 恐らく

はグレモリー眷属だ。違うか？」

「いかにも。私はグレモリー眷属の一人です。」

「だとすれば俺は敵じゃない。信用しろとは言わないが、あんたの主人であるリアス・グレモリーの助けにはなる筈だ。」

「そうですか。」

その言葉に、幹也は話を通じたと思いき安堵する。そして直後に

「まあ、知った事では無いですが。」

その場から飛び退いた。

結果として、幹也の判断は正しかった。

一瞬でも回避が遅ければ、凄まじい剛打の餌食になっていたのだから。

「ツツツ??？」

一瞬前まで幹也が居た場所に範囲にして5m程のクレーターが出来上がる。

一撃の、それもただの拳打でこの威力。どう考えてもまともな手合いでは無い。

「何の真似だ……??？」

「勿論、貴方を排除する為に攻撃を加えさせて頂きました。」

何の気なしに、むしろ何が疑問なのか分からないといった様子で首を傾げる女性。

表情と相まって益々機械じみている。

幹也は再度問いを投げる。

「何故だ。墮天使の排除という目的はそちらも一緒の筈だ、少なくとも今攻撃する理由が分からない。」

信用が無いのは百も承知。しかしそれなら墮天使の撃破にある程度利用した後には攻撃をしても遅くは無い筈だ。

「私は主人の命に従うだけです。」

しかし淡々と、女性は次の攻撃の為の姿勢を取る。

交渉の余地は最早無い。であれば、今は多くの情報を集めることを優先する。

(主人……か。)

幹也が引つかかったのはその単語。

どうにもその辺りにだけ、幹也と目の前の女性の認識に違いがある。

女性の忠誠心は恐らく本物だ。表情から窺うのは難しいが、その瞳には迷いも濁りも存在しない。しかし、それならば彼女の言動に違和感が生じる。

幹也は一瞬考え、口を開いた。

「お前の主人って、誰？」

「言う必要はありません。」

「成る程、リアス・グレモリーじゃないのは確かみたいだな。」

「!!?..」

初めて、目の前の女性の表情が変わる。

あっさりと謀られた自分と、眼前の敵への怒りによつて。

「貴様……!」

「ようやく分かりやすい表情になったな?——誰の差し金だ。」

幹也もまた、意識を切り替える。

純粹なグレモリー眷属ならばともかく、二心を持って仕える下僕になど容赦をする必要は無い。

「答えるつもりはありません。」

「そうか。ならば戦士では無く、賊として始末するでしょう。」

両者の殺気が膨れ上がり、互いの四肢に恐るべき力が込められる。

そして直後に、刀と拳。

黒と青が激突した。

## 邂逅

体液の交わりも。

愛の囁きも。

何もかもが『心』に、魂に届かないのであれば。

私達の在り方には、意味が無いのではないか——？

月下に轟音が炸裂する。

ぶつかり合う二つの影は互いの最速を以って眼前の敵を仕留めるために己の技を撃ち放つ。

『!??!』

交差は一瞬。その一瞬で、互いの力量を把握する。

(巧い！剣筋に一切のブレが無い…並みの剣客ではありませんね…！)

青を基調とする女性は鋭い剣撃に息を呑み、

(重い…体ごと叩きつける様に打ち込んできやがる…)

黒いコートの少年、幹也は凄まじい豪打に冷や汗を流す。

一拍。

瞬きの間に息を整え、再度二人は激突する。

乱打。青の女性は先程の一撃を重視した打撃では無く、手数を重視した連打を幹也へと放り込む。

対して、幹也はそれを最小限の動きでかいくぐる様に回避する。

(何という反応速度…全て紙一重で回避しますか…！ですが、これ以上踏み込めば刀は振れない筈…！)

この時、女性は幹也を未だ侮っていた。

幹也と女性の距離はもはや五センチ程しかない。互いの呼吸音が聞こえる距離で、二人は睨み合う。

この距離では最早打撃は出せない。そう判断した女性は後ろへと跳ぶ為に足に力を

込める。

しかし、幹也の方が一瞬速い。

軸足を使い、体を独楽のように回し刀を振るう。

(この距離で!!?)

女性の動揺に、幹也は頓着しない。

刀を手の中でくると回し、頸を狙う。

峰打ち。幹也の狙いはあくまで生け捕りだ。しかしだからと言って加減はしない。

(これだけの頑健さに加えて悪魔の体…。首を折られた程度では死ぬまい。であれば  
!)

刀を握る手に力を込める。

(手加減無しで打ち込むまで!!?)

竜巻のような回転と共に叩き込まれた峰は吸い込まれるように頸に直撃する。

「!!?!」

驚愕したのは女性——では無く。

「なんだ、そりゃ…!!?!」

幹也であった。

あまりの事態に幹也は女性から距離を取る。

僅かに痺れる右手を意識しながら状況を冷静に分析する。

(硬い、とか言う次元じゃねえ。バットで壁ぶつ叩いたみてえな感触だ…)

肉や骨の感触では無い。その考えを裏付けるように、彼女の首元には変化が生じていた。

「それは…鱗か？」

人間の首元に魚の鱗がびっしりと浮かび上がっている。

余りにも異様な光景であるにも関わらず、当の本人は当然のように振舞っている。

「いかにも。我が身は主人の使い魔にして誇り高き竜の種族。貴方ごときの刃が通る道理はありません。」

「成る程…」

何と無く、ではあるものの相手の素性がわかってきた幹也。

しかしだからと言ってあの防御を突破する手段に直結するかと言われれば、それはそうでは無い。

「ハア…」

「万事休す…と言ったところでしようか？」

「んな訳あるか。したり顔で物言つて外してんじゃねえよ。」

「……」

目を細めて睨んでくる女性を無視し、幹也は刀を腰だめに構える。

「…なんの真似です?」

「ハッ、決まってるだろう。」

切り札その一だよ——と、幹也が笑った途端、幹也の黒刀が眩い光を放ち始めた。

「!!?」

刀から放たれる光はまさに月光。光を放ちながら、あらゆるものから、その刀は光を集めている。

草や樹木からも小さな光が放たれ、幹也の刀へと集まっていく。

「降り注ぐは星の息吹——」

力のある言葉が紡がれる。

「吹き抜ける命の奔流——」

女は本能で察する。

これは、この一撃は撃たせてはならない——!!?」

「夜光……!!?」

この時、女はその一撃の恐ろしさを本能で悟りながらも具体的な行動は取れなかった。取ろうとしなかった訳では無い。純粹に間に合わなかっただけである。

故に。

幹也が攻撃を中断させられた理由は女では無く、

「……なんだお前は？」

別の理由の介入である。

それは、一言で表すなら『赤』だった。

赤の全身鎧に身を包んだその姿は、龍を象っている。

そして、その鎧は一言、こう答えた。

「——僕は、赤龍帝だよ。」

## 幕引きと幕開け

悲しい哉、私達はこの体器に縛られている。

この壁を、その隔たりを、超える術を我々は持たない。  
故に。

今の人類が囁き、育み、守り続ける愛は幻想だ。

それは無意味で無駄で無惨で無様で——余りにも残酷だ。

男の手記はここで途絶えていた。

後にこの手記の持ち主は中東の紛争地帯でのボランティア活動中に流れ弾を受け、絶命したとされている——。

赤龍帝。

かつて三大勢力を戦闘の余波だけで壊滅寸前に追い込み、その脅威故に一時的に戦争そのものを停止させた、二天龍の片割れ——

(確か神器に封じられたと聞いたが……まさか所有者がグレモリー眷属になっていたとはな。)

見た所、神器の到達点である『バランスブレイク禁手化』にも至っている。

であればこの気配の大きさも納得が行く。だが……

(そう考えると『別の疑問』が浮かぶんだが……)

「それで、君は何者なのかな？」

幹也の思考は赤龍帝の所有者の声に遮られる。

「僕の大切なティアマツトに傷をつけたんだ……ただでは済まさないよ？」

「大切ななんて……勿体無いお言葉でございます……御主人座……」

先程までの敵意に満ちた顔では無く、恍惚とした、蕩けた表情を浮かべる女性……ティ

アマット。

(五大龍王の一角か…道理で手強い訳だ…)

眼前で広がる場違いな甘い空気を無視し、思考を再開させる。

だが、またしても邪魔が入った。

「またティアアマットばかり鼻肩するのね…妬いちやうわ、イツセー。」

真紅の髪をなびかせながら、月を背に上から悪魔の羽を広げ、ふわりと舞い降りる女性。

「鼻肩なんてしてませんよリアス。僕の心はあなたの物だ。」

「…全く、そんな事言われたら怒れないじゃ無い…」

リアス・グレモリー。

この街を治める悪魔の領主。彼女もまた、赤龍帝、イツセーのキザな台詞に頬を赤らめる。

(イツセー…兵藤一誠か!? 迂闊だった…俺としたことが見落としていたとは…!)

リアス・グレモリーの動向や町内のはぐれ悪魔の討伐に気を取られて、近くの重大人物に気づかなかった事に、齒噛みする幹也。

「それで? 貴方は何者なのかしら?」

リアスの問いにそろそろ無視出来なくなってきた幹也は渋々答える。

「ボランティアだよ。」

「……なんですって?」

「ボランティア。慈善団体……いや、個人か……。まあ、この辺はどうでもいいだろ。俺の目的はここに潜んだ堕天使共の排除だ。それが済んだ今、もうここに用はない。帰らせてもらおう。」

「……帰すと思うのかしら?」

幹也の返答に殺気すら滲ませてリアスは幹也を睨みつける。

気づけば、幹也の後ろには、囲むように白髪の少女と金髪の青年が立っていた。

(他の眷属か……)

「さあ、この状況であなたはどうか逃げるつもりなのかしら?」

勝ち誇った様に告げるリアスに、幹也は淡々と返す。

「ふむ——。そろそろか。」

直後。

幹也の直上から、幹也を囲む様に雷撃が降り注ぐ。

『!!??』

驚く全員を嘲笑う様に黒い風が包囲の隙間を吹き抜け、雷撃を透過し幹也へとまとわりつく。

「ツ！」

雷撃が収まり、黒い風が霧散する。

そこにはもう、幹也の姿はなかった。

「すまん二人とも。助かった。」

廃教会から場所は移り、幹也は自宅にいた。

先程の騒ぎから、時間は十分も経ってはいない。

実はあらかじめ、幹也の後方に退路を確保する係として、朱乃と黒歌を潜ませているのだ。

「構いませんわ。幹也君の為ならなんでもしますもの…それこそ…その…なんでも…」

「そうか。落ち着け。黒歌もありがとう。助かった。」

いきなりトリップしだした朱乃を冷静に斬り捨て、黒歌に礼を言う幹也。  
しかし、

「……」

「…黒歌。」

反応が鈍い。いや、原因はわかっている。

「妹…か？」

「にやあ。いるのはわかってたんだけど…やっぱり直に見るとちよつとね。」

様々な誤解や事情があつたにせよ、実の妹を置いて離れたのだ。

「……大丈夫か？」

「大丈夫にや。和平が成れば、こここそする必要も無くなる。そうすれば、またあの子に…白音に堂々と会える。いっぱい怒られるかもしれないにやいけど…沢山謝って、必ず仲直りするにや。」

「……そうか。」

かくして。

新たな決意と共に、一連の騒動は幕を閉じた。

或いは、始まったのかもしれない。

これから巻き起こる、大いなる戦いへの、カウントダウンが。しかし幹也達はそんな事など知る由もなく、ぐっすりと眠るのだった。

以下、三大勢力首脳陣に送付された報告書より抜粋。

はぐれ墮天使、並びにはぐれ祓魔師の企てた神器強奪事件は無事解決。シスターであるアーシア・アルジエントはグレモリー眷属に保護され、後に『僧侶』として眷属へと転生した。

尚、はぐれ墮天使の首謀者、

カラワーナ

ミツテルト

ドーナシーク

以上三名の死亡を確認。

はぐれ祓魔師であるフリード・セルゼンは依然逃亡中である。

## 戦闘校舎のフェニックス 裏

## 白昼の襲撃者

事件から一夜明けた翌日。

幹也は普通に学校に登校して居た。

(……グレモリー眷属、か……)

頭に思い浮かぶのは昨夜の光景。赤龍帝と五大龍王との交戦。

(どうにも不自然だ……明らかに裏がある……)

赤龍帝はまだわかる。神器持ちには世界中に存在するが、どの神器が現在しているかを把握しているのは、天界のデータベースやグリゴリの情報網ぐらい。しかしそれでも、正確に把握しているかと言えばそうでは無い。情報そのものが大雑把な物であるし、予期せぬイレギュラーや、まだ神器が覚醒してないという場合もあり得る為、兵藤一誠が赤龍帝だという『偶然』があつたとしても何らおかしくは無い。

(だが、それはあくまでも所持の話だ。まさか覚醒から数日で禁手に至るつてのは幾ら何でも異常……アザゼルに聞いたら眼を見開いていたし……)

しかしこれも、細かい疑問に目を瞑るのであれば、稀少な素質があつた、で済む話だ。

しかし

(ティアマットだけが解らない…あれはどのタイミングでこの街に来て眷属になった？いやそもそも、何故奴の忠誠心はリアス・グレモリーでは無く兵藤一誠に向いている？)

接点が無い。そして、あの忠義はどこから起因する物なのか解らない。

考えられるとすれば、兵藤一誠とティアマットは眷属になる前から何らかの関わりがあつたという事。

(だが、だとすれば、今度は兵藤一誠が解らない。それとも、これもまた何らかの偶然が重なったのか？こんなにも都合のいい偶然が重なるものなのか？)

思考がぐるぐると回り始める。

その時、横からふにゆりと柔らかい感触。最早慣れてしまったその感触は…  
「幹也君？また考え事ですか？」

姫島朱乃だった。

「あ、すいません。昨日の夜の事で、ちよつと…」

「昨日の夜…私との熱い夜戦のことですか？」

「違います。というかそんな事実はございません。」

「むう、最近はもう胸を当てる程度では動揺しなくなっていましたね…」

「毎日やられればさすがに慣れますよ…」

「じゃあ、違う柔らかさを当ててみますか…」

「違う柔らかさ？」

「ハイ…具体的には、お腹の下の方です。」

「朝っぱらから何を仰ってるんです!!？」

「ちよつと水つぽいですけど、こればかりは…」

「いい! 当てんでいい! 頼むから正気に戻れ!!？」

「え?... そんな、○器を弄れなんて…」

「どんな聞き間違いだああ!!？」

この二人、今日も今日とて平常運転である。

昼休み。幹也は購買へと向かっていた。

昨夜の疲れか、少し寝過ごしてしまい、朱乃の分しか弁当を作れなかったのである。

(今日はパンでいいか…廊下ガラガラだし、購買もそんなに混んでは——!!?)

この学園の購買はかなり評判がいい。それこそ、昼休みには購買めがけて多くの生徒がなだれ込む程に。なのに。

(廊下には誰一人居ない……!!??どうなっている!!??)

幹也はすぐにその答えに辿り着く。

それは極めて初歩的な魔術の一つ。

(『人払い』の魔術……!)

「やあ。」

その思考に行き着いた瞬間、後ろから声をかけられた。

「月野幹也君……だよな?」

「ああ、そうだけど? 兵藤一誠君。」

背後に立って居たのは、赤龍帝、兵藤一誠だった。

「なんか用かな。俺、君と話した事なかったと思うんだけど……」

あくまで幹也は一般人を装う。

しかし、

「ティアマツト、やれ。」

「承知」

振り返った幹也の背後から、ティアマツトが飛び掛かる。

(嘘だろ!!??こんな白昼堂々仕掛けてくんのかよ!!??)

幹也は体を捻り、背後からの奇襲を回避。即座に後ろへと跳び、二人を正面に捉える。

「節操とかねえのかお前ら……」

「勿論持ち合わせているさ。僕らが本気を出したら、あつという間に校舎が吹き飛んじゃうからね。」

「……………」

兵藤の軽口には付き合わず、幹也は無言で刀を取り出し構える。

「その刀……やっぱり君があの時の人か。」

「だったら何だよ。」

「いや、昨日の件でうちの部長が少しご機嫌斜めでね。よければ放課後、部室に来てくれないかな?」

「……嫌だと言ったら?」

「そうだね……姫島朱乃を攫うとか?」

「……………」

一瞬。

立場も何もかも忘れて、幹也は目の前の肉塊を斬り刻みたいという衝動に駆られそうになる。

しかし、

(落ち着け……落ち着け……!)

自身を慕ってくれている三人の顔が脳裏を掠める。

僅かに残った理性が辛うじて刀を抜く手を止めていた。

「……随分物騒だな。いつから悪魔というのは人攫いに成り下がったんだ？」

「唯の人じゃ無いだろう？」

絞り出すような挑発に、思いもよらぬ返答が来る。

その一言で、幹也は今度こそ正気を取り戻した。

（随天使とのハーフだということに気付いている……？ いや、確かに気配を探れば分かる事ではあるが……）

あくまで、幹也と朱乃は隠密の立場に位置している。故に、気配を隠す、或いは誤認させるなどの初歩的な技術はもちろん、そもそもどれだけ悪目立ちしようとも悪魔などの三大勢力に属する者には気取られない為の技法などを日常的に使っている為、そもそもバレルる事などそうそうありはしないのだ。考えられるとすれば、自身よりも高いレベルの技量を持つ者に見抜かれる事ぐらいだろうが……

（成り立ての転生悪魔にはまず無理だ。だとすれば、五大龍王、ティアマツトが見抜いたのか？）

つくづく厄介だ、と幹也は内心吐き捨て、

「人じゃ無い？ どういう事だ？」

とぼける事にした。

「つまらない芝居はよしなよ。彼女が墮天使とのハーフで、『母親が殺されている』事も知ってるよ。」

「……」

とぼける事で、情報経路を零してくれる事を期待したのだが、代わりに別の情報が得られた。否、情報というよりは疑問だが。

（こいつも全部把握しているわけじゃ無い……このズレが何なのか知りたい所だが……揺さぶり方を変えてみるか。上手くいけばこいつの本性も暴けるかもだし。）

やり方を切り替える為、幹也はわざとらしい程不可解そうな態度を取る。

「母親が殺されている？朱乃さんのお袋さんは生きてるぜ？今日もお袋さんに弁当を作って貰ったと嬉しそうに言ってたし。」

虚実を織り交ぜる事で、相手の出方を伺う幹也。対して、兵藤は得意げに、いつそ嘲笑を浮かべて幹也に言う。

「君、信用されていないんじゃないか？或いは、君の能力を利用する為に擦り寄つてるとか。」

その言葉に、しかし幹也は動じない。

（仕掛けるとすれば……か。）

幹也は肩を竦め、

「うーむ、それは無いと思うがなあ…あの女が寢床で嘘をつけるような器用さを持つて  
いるとは考えられん。」

「……………なんだって?」

爆弾を落とす事した。

「いや、彼女は清楚で貞淑だが、性根は淫蕩そのものだぞ? 最初こそお互い不慣れで苦勞  
したが、今では毎晩シーツを変えねばならん程に乱れるから水道代がかさむかさむ…」

幹也の言葉が続くにつれ、兵藤の表情が凍りついていく。

(存外、わかりやすい男だったな。)

幹也の評価はそんな所だった。

「嘘だ…あり得ない…彼女は僕の…」

ぶつぶつと何かを呟く兵藤の姿は、どこか狂気を感じさせた。

「主人…そろそろ『人払い』の効果が…」

「あ、ああ、そうだね…ありがとうティアマット。じゃあ、月野君…放課後に。」

「行くとは言つてないぞ」

「来てもらうよ…必ずね。」

最後の一言にだけ、凍りつくような殺気が込められていた。

二人が立ち去り、同時に辺りに喧騒が戻って来る。

「朱乃さん、聞いてましたか？」

「はい。しつかりと。」

いつの間にか、幹也の後ろには朱乃が立っていた。

「それで、これからどうするのですか？」

「こうなった以上、向こうの申し出にのるしか無いですね。断れば何をしでかすかわからないので。」

「私は？」

「今日は急いで帰って下さい。念のため、外に黒歌とガブリエルを待機させておきます。」

ガブリエルを動かすのはリスクが大きいです。しかし相手が赤龍帝と龍王ならば、話が別だ。出し惜しみすれば、一気に飲み込まれる事もあり得る。

「……わかりましたわ。」

洩々、と言った様子で頷く朱乃。しかし直後に頬を赤らめ、

「所で、さっきの話ですけど……そんな乱れるプレイがお好みなのですか？」

「……………」

この時ばかりは、流石に言葉が出なかった。

放課後。

昼休みの窮地（主に朱乃）をなんとか脱し（というかチャイムに救われた）た幹也は、帰りのホームルームを終えると、足早に教室を出る。

「……何だ、迎えが来るならそう言ってくればよかったのに、つくづく気の利かない連中だな。」

「申し訳ないね、連絡不足で……」

廊下に出て早々、幹也の視界に入ったのは金髪の似合う美青年。

「構わないさ木場祐斗。」

木場祐斗。

この駒王学園の生徒であり、同時に彼もまた、オカルト研究部の部員である。

「んじゃ、さっさと行くとしようぜ。手早く終わらせて帰りたい」

「そうだね。それじゃあ、付いて来てもらえるかい？」

木場の先導で、二人はオカルト研究部の部室、旧校舎へと歩き始める。

(さて……どうなることや……)

頬を撫でる風とは裏腹に、陰鬱な物を感じなら、幹也は旧校舎を見据えるのであった。

## 待ち受ける悪魔達

旧校舎。

学園のはずれにある古びた木造建築の学び舎は夕暮れ時という事も相まって学園の七不思議に数えられてもおかしく無さそうな雰囲気醸し出していた。

(さーて……どうすっかな……)

「幹也君、大丈夫かい？ さっきから一言も喋らないけど……」

「いきなり呼び出しくらって怪しげな建物に連行されれば、そりゃあ口数も減るだろうよ。」

前を歩く木場の言葉に、険のある声で返す。

「……ごめんね。本当に。」

「……………」

意外にも、返ってきたのはか細い謝罪だった。

(なるほど……一枚岩じゃ無いって訳か……)

「最近、部長の様子が少し変だね……前よりその……ワガママになっちゃってね。」

「最近……ね。」

それは兵藤一誠が現れた時期か？とは、聞かなかつた。否、聞くまでも無かつた。  
「祐斗先輩。」

旧校舎の入り口に差し掛かつた時、横から呼びかけられる。

白髪の小柄な少女。

「やあ、小猫ちゃん。」

小猫、と呼ばれた少女は幹也を見ると、伏し目がちに頭を下げる。

「初めまして、私は塔城小猫といひます。」

「月野幹也だ。」

短く返す幹也。平静を装つてはいるものの、内心は少し動揺していた。

（よく見ると目元とかそっくりだな…それにしても、この二人…）

幹也が二人を見た第一印象は、

（苦勞人、だな。）

完全にリアス・グレモリーの傀儡、というわけでは無いようだ。

（いや、兵藤一誠の、と言うべきか…）

取り敢えずまともな存在がいる事に胸を撫で下ろす幹也。

「着いたよ」

気が付けば、三人は一際大きな両開きの扉の前にたどり着いていた。

(ん？これは…)

扉の前に立った幹也は違和感に気付いた。

或いは気配と言うべきか。

「……………」

「これは…?」

二人も気付いたのか、顔色が変わる。

(反応を見る限り、この二人も知らなかったのか?)

となると、この来客はグレモリー眷属そのものにとつて予期せぬ事態なのだろう。

(そこに兵藤一誠が含まれているかは怪しい所だが……ここで考えていてもしようがないか……)

僅かに息を吐き、肩の力を抜く。そして。

「木場。開けてくれ」

「いいのかい?」

「構わない。頼む」

扉が開く。ここまですれば引き返す事は出来無い。

(引き返す? ハッ、何を考えてんだか……)

幹也は自身の頭によぎった考えを鼻で笑い飛ばす。

最初から、不退転の覚悟でここまで進んで来たのだ。

(悔いの無いように生きる)

目的は何も変わって無い。ただそのために、幹也は躊躇いなくその一步を踏み出した。

最初に目に入ったのは趣味の悪い内装だった。

壁一面の魔方陣。仄暗い部屋。部屋を照らす蝋燭の火が揺らめいているせいか、神秘的というよりは、何処か不気味という雰囲気を感じ出していた。

目の前には、四人の男女。

紅髪の女性、リアス・グレモリー。

金髪の少女、アーシア・アルジエント。

青い髪の女性、ティアマツト。

そして茶髪の青年、兵藤一誠。

窓の左を見ると、黒髪の女性を中心にした男女が規則正しく並んでいた。

(なるほど……気配の正体はこいつらか……)

生徒会。

グレモリー眷属が夜を守るのであれば、彼等は昼。

会長、支取蒼那——本名ソーナ・シトリーを王に据える、シトリー眷属である。

(……ん?)

ふと、幹也はある事に気付く。

グレモリー眷属とシトリー眷属との違い。

(敵意……というよりは不信任か?)

グレモリー眷属の一部を除いた女性が兵藤一誠に対し熱い視線を送っているのに対し、シトリー眷属は王であるソーナ・シトリーを含めた全員が兵藤一誠に何処か鋭い視線を送っているのだ。

つまりこれは、

(ソーナ・シトリーは気づいてる……兵藤一誠の異質さに)

若手随一の切れ者、という風評は伊達では無い。

幹也はそれを再認識した。

「初めまして。月野幹也君?」

ソーナ・シトリーに意識を向けていると、正面のリアス・グレモリーがそう切り出し

た。

「どうも」

対して、幹也は素っ気なく返す。

「あなたに対して、言いたい事や聞きたい事は山ほどあるけど——先ずは歓迎するわ」  
につこりと、彼女は赤いチエスの駒を顔の前に持つて来て、

「悪魔としてね」

そう告げた。

対して。

そんなリアス・グレモリーに幹也もまた、にへら、と表情を緩めて、

「願い下げだ馬鹿野郎」

そう切り返した。

かくして。

リアス・グレモリーと月野幹也の舌戦が、幕を開けようとしていた

## 主導権を握るのは

恐らくは予想だにしなかった幹也の返答にこめかみをひきつらせるリアス・グレモリー。

否、驚いているのは彼女だけではない。

兵藤一誠と龍王ティアマットを除いた、それこそ生徒会役員を含めた全員が顔色を変えていた。

「願い下げ…とは、どういうことかしら？」

「そのまんまの意味だ。俺はあんたの下につく気はない」

先程よりも深い笑みを浮かべながら問うリアスに、幹也もまた平然と返す。

「理由を聞いても？」

「あんた達が信用できない。それだけだ」

全くの嘘、というわけでもない。

以前までの彼女ならまだしも、現状のリアスを信用することは、領主としての彼女を見て来た幹也にはできなかった。

「そう…それは残念ね。でも、だからと言ってこのまま帰す訳にもいかないわ」

「だから生徒会と協力して俺を潰すと？」

空気が張り詰める。

一触即発という言葉がシトリー眷属の頭をよぎる中、その空気に待ったをかけたのは当事者の二人ではなく、生徒会長支取蒼那こと、ソーナ・シトリーだった。

「ご安心を、月野幹也君。我々は今回の話し合いについて極力口を出すつもりはありません」

その言葉は幹也にとっては少々意外な発言だった。

「意外だな。あんたも悪魔なんだろう？ だったらリアス・グレモリーに協力するのが普通なんじゃないのか？」

「私はあくまでも補佐、それもリアスだけでは処理しきれない事態が起きた場合のみに動くだけです。本分を逸脱した行動は良い結果を生みませんから」

「なるほど」

表情には出さないが、この時幹也は内心安堵していた。

もし今回の話し合いにソーナが介入していれば、どんな結果になるか、幹也は予想出来なかったのだ。

（取り敢えずは一安心か……ここで正体がバレたらどうなるかわかったもんじゃ無いからな……）

不安要素はとり除けたが、しかし本番はこれからだ。  
まだ探り合いは始まったばかりなのだから。

「それじゃあ始めようぜ、あんたは何が聞きたいんだ？」

ソファに腰掛け、そう切り出す幹也。

「あなたの正体。それだけよ」

対して、リアスもまた簡潔に返す。

「人間だよ。ちよつと腕が立つだけだな」

「嘘ね。ただの人間が五大龍王と渡り合える筈がないわ」

「偏見だな。人間が本当に弱いならエクソシストだの退魔士だのが成り立つ筈がないだろうが」

この辺りの問答は想定済みなのか、幹也は平然と返していく。

それが気に食わないのか、リアスの表情は対照的により険しくなる。

しかし幹也は気にもせず、淡々と言葉を投げかける。

「おい、まさかとは思いますが、そんな浅くて狭い考えで俺を追い詰めるつもりだったのか

？」

拍子抜け、そう言わんばかりの幹也に、言葉に詰まるリアス。  
その時だった。

「言葉に気を付けた方が良いんじゃないかな？」

横から兵藤一誠が口を挟んで来たのは。

「イツセー……！」

恐らくは、想い人からの助け舟に潤んだ瞳を向けるリアス。

「いきなり割り込むなよ。驚くだろうが、下っ端」

「あいにくと、僕は部長の『女王』だ。その事に、恥じ入る点は一つもないつもりだよ」  
歯の浮くようなキザな台詞だが、リアスとティアマツト、アーシアは恍惚とした表情  
をしている。

それ以外は険しいが。

「生憎と、お前の身分なぞ興味は無い。言葉遣いに関しては生まれつきだ。癩に障った  
としてもこっちの予定無視で呼び出されてんだから文句の一つくらい聞き流せよ」

「君は自分の立場が分かっているのかい？これだけの人数に囲まれて、前のように逃  
げ出せるとでも？」

「生徒会をさりげなく巻き込んでるけど、それとも自分の主人さえ良ければ後はどうで

も良いタイプか？」

会話を聞いていたソーナは思わず顔をしかめた。

(ここで戦闘になれば、どれだけ被害が出るかわからない……何としても衝突だけは避けなくては……！)

当事者のだけ済めばまだ良い。だが、無関係な者にまで危害が及べば確実に死者が出る。

それは最も避けたい最悪のシナリオだった。

「僕としては構わないよ？今ここで始めても」

そんな考えを、周りの意見すらも聞かずに勝手に始めようとしている兵藤に、遂に我慢の限界なのか、生徒会の少年が前に出る。

「おい兵藤、少し」

「匙くん、生徒会は口を出さないんじゃないか？」

宥めようとした少年、匙を睨みつけながら一蹴する兵藤。

だが、幹也もまた、一般人への危害を考えていた。

(この手の奴には普通に言ってもつけあがるだけか……)

幹也は手法を変えて切り込む。

「別に俺も構わないぞ？恥をかいても良いならな」

「へえ…余程自信があるんだね？」

「いや？流石に真正面からかち合えば、流石に俺も勝てねえよ？」

先程までの自信とは程遠い発言に全員が困惑する。

「実力があるとは言っても所詮は一人。数の暴力には勝てねえよ。精々何人か道連れにする程度だ」

だが、とそこで幹也は言葉を区切る。

「俺からすればそれで充分だ。それだけでリアス・グレモリーの地位は確実に失墜する」

「どういう事だい？」

「簡単な事だよ木場。人間との融和政策が行われている現状で、ただ強いというだけ人間と戦い、眷属の大半を失ったとなればどうなるか？

政策を進めている魔王からはペナルティを受け、人間差別をしている悪魔からは後ろ指を指され続ける。人間風情に情けない、ってな」

それは、決してありえない話では無い。寧ろ高確率で起こり得る話だった。

「……………」

「分かかって貰えたようでは何よりだ」

押し黙った兵藤に、もはや興味は無いと、幹也は次の話題に移ろうとした時、ソーナがふと気付く。

「随分、悪魔の内情に詳しいのですね？」

「はぐれ悪魔がそんな感じの事を喚いてたんだよ。やれ現魔王に従順な主には付き合いきれないだの、転生悪魔と同列に扱われたくないだのってな」

「———そうですか」

ソーナの疑問に平然と返す幹也。

一見するとその態度にはおかしな点は見受けられない。

だが、ソーナはこの時ある事に気付いていた。

(表情が強張っている……?)

僅かにはあるが、幹也の表情が硬い。いや、それは今に始まったことではなく

(さつき兵藤君と一触即発の空気になった辺りからずっと余裕が無いように思える……)

明確な変化、とまではいかないものの、確実に表情が違う。

ソーナがこの変化に気づいたのは、チェスの対局で鍛えられた洞察力と、持つて生まれた才能のおかげであろう。

加えて立ち位置も関係している。

相手と向かい合うような対面ではなく、盤面を俯瞰する位置取りだからこそその落ち着いた視点だったからである。

しかし、だからこそ、ソーナは分からなかった。

(何故……ここまでの流れは常に彼に傾いている。なのにどうして、彼の表情には余裕が無いの?)

どれ程思い出しても、幹也が不利になった場面は一切無かった。にも関わらず、幹也の表情は僅かに険しい。

そしてそれは、

(何かあるというの?ここからひっくり返るかもしれない、逆転の一手が) ソーナにとっては充分すぎるほどのヒントであった。

この時、幹也にとって不幸だったのは、そのソーナの疑念が的を射ていた事であり、また同時に幸運だったのは、ソーナがこの交渉に一切の手出しをしなかった事である。

何故ならこの交渉は、

幹也にとって、圧倒的に分が悪い戦いだったからである。

## 彼の答えと彼女の推察

秘匿度、というものはどれほど些細な情報でも必ず設定されている。

国家機密から近所の井戸端会議に至るまで、必ず特定の場所、或いは人物に対して制限がかけられる。

とりわけ、幹也が抱えている情報は最高ランクの秘匿度が設定されている。

今回のリアス・グレモリーとの交渉において、その差が、その決定的な違いが幹也が劣勢であると言える根拠である。

リアスのようにある程度事情を知る人間になら喋っても大丈夫、という融通が効く立場に幹也はいないのだ。

これが、例えばまだ真面目な領主としてのリアス・グレモリーであつたならば、幹也も考えただろう。

だが、現状、兵藤一誠に狂い、そしてその兵藤一誠自身もまた油断ならない人物である以上、全てを話すわけにはいかない、

というのが幹也の考えだった。

(和平に向けて勢力がデリケートな状態にある今、引つ掻き回される訳にはいかない……)

何より、兵藤一誠は朱乃だけでなく、黒歌やガブリエルにまで手をだしかねない。そんなことになれば、今度こそ幹也は自分を抑えられる自信が無かった。

(我ながらなんとまあ…)

こんなにも独占欲の強い人間だったとは、と自嘲する。

しかしそれも一瞬。

即座に頭を切り替え、目の前の交渉に専念する。

(長期戦になればこっちのボロが出そうだな…シトリー辺りならもう気付いてそうだが…まだ具体的な確証は得られてないのだろう。)

ならば、と幹也は考えを固める。

(些か性急だが、決めに行くか。幸いにも、『今の』リアス・グレモリーは視野が狭い。だったら目の前にニンジンをつら下げれば必ず食い付く筈)

そして幹也は意を決して口を開く。

「やめよう」

「やめよう」

一瞬、生徒会を含めた全員が呆気にとられた表情をする。

そんな様子を幹也は気にせず、気だるそうに口を開く。

「もうやめにしよう、痛くもない腹の探り合いはうんざりだ。そろそろ帰りたいから、こっちの要求を言わせてもらおうぞ。」

周りが何かを言いかけたが、それを視線で封殺しながら幹也は告げる。

「まず一つ。俺の行動に文句を言わないこと。具体的には、あんたらを通さずはぐれ悪魔を狩ったりする事だな。人命がかかっているのにあんたらのお伺いを立てている暇はないからな。」

びつ、と二本目の指を立て、続ける。

「二つ。はぐれ悪魔以外の件でこの街に何かしらの異常があった場合は協力する。協力がなくても勝手に動く。俺が守りたいのは貴様らでは無く無力な者達だ。ちょこまかされるのが嫌なら、有事の際には素直に情報を共有する事をお勧めする。ただしこれはあくまで領土の運営に関することだけだ。他の事については俺は頼まれても介入しない。」

半ば脅迫に近いが、しかし同時に効果的でもある、とソーナは一人感心していた。

リアスは渋々といった様子だったが。

(いえ、渋々でも納得できているのなら、まだ目はありますか…)

ここで意地になって拒絶するようなら領主としての器は無かった、否、失われたと言わざるを得ないだろう。

領主ならば、領主では無くとも大勢の民草の命を預かるならば、自らの意地を捨てても最善を選ぶ。

清濁合わせて抱え込む器がなくてはならない。

(少なくとも今のリアスには最低限ですが、まだ領主としての自覚がある。これ以上彼に入れ込み過ぎなければ良いのですが……)

親友への心配をしながらも、ソーナは目の前の交渉に集中する。

「あなたの条件はわかったわ。でも、それを私達が飲むメリットはどこにあるのかしら？」

酷く加虐的な笑みで問いかけるリアス。

それに対し幹也は

「はあ？ 今のはむしろお前らのための条件みたいなもんだらうが。」

「……………」

本当になんのことだか理解していない様子でリアスは間の抜けた声を漏らす。

「今上げた条件を飲めば、お前らは有事の際に自由に動かせる戦力を得る。加えて、人間や多種族との交友を深めようとする魔王の方針にも合うだろう？ お前はこう評価され

る筈だ。魔王の思いを汲み、尚且つ人間と分け隔てなく交友関係を持てる手腕を持つ、有能な若手だ、つてな。

俺は気兼ねなく活動ができ、お前は高い評価と円滑な領地の運営が可能になる。お互いに悪い話じゃない筈だ。」

ぐらり、と何かが傾く音が聞こえた気がした。  
変わる。

流れが、明確に変化する。

そしてこの流れは

(覆せない。これはもう、決まりだ。)

この感覚を、ソーナは知っている。

「……純血主義のはんかんをかいそうなものだけれど?」

「時代は変わる。いかに大きな権力者であろうとも、大きな流れには逆らえない。お前はその先駆けになれるチャンスを抑える立ち位置にいるんだぜ? 理解してない訳じゃないんだらう?」

最後の抵抗すら徒労に終わる。

そして

(チエックメイト)

ソーナにとっては慣れ親しんだ『詰み』の感覚。

「……………いいでしょう。あなたの条件を飲むわ。」

皮肉な話だが。

——決め手は悪魔の囁きだった。

『そうそう、言い忘れたんだが、これは条件じゃなく警告だ。俺の知り合いなんかを人質にして言う事を聞かせよう、なんて考えるなよ？』

もしそんな事になれば、俺はお前らに一切の容赦はしない。』

そう言い残し、幹也は部屋を後にしようとしたのだが、ここで思わぬ人物が校門までの見送りを申し出たのだ。

「意外だな。お前は一番俺の事を嫌っていると考えてたんだが、それともここで俺と決

着をつけるつもりか?——兵藤一誠。」

「そう身構えなくても、ここで君と事を構えるつもりは無いよ。」

そう、グレモリー眷属の女王、兵藤一誠である。

「信用ならんな。お供のティアマツトも連れずに一人でお見送りとは、何のつもりだ?」  
現在、兵藤一誠に護衛役のティアマツトは付いていない。

「酷いなあ、ぼくは君に親近感を覚えているんだけど?」

「笑えない冗談だな。」

「いやあ、何の冗談でも無いよ。だって君——僕と同じ転生者でしょ?」

「——あ?」

思考に、誤魔化しようの無い空白が生まれる。

「全く、お互い大変だよね、あの『女神』、いきなり呼び出しておいて、『お前は死んだが妾が転生させてやる』とか偉そうに……まあおかげで僕は良い思いが出来てるから構わないんだけどね。」

思考が追いつかない。

兵藤一誠の言葉だけが自身の体を通過していく。

「おまけに『原作』と所々違うから何事かと思つたら別の転生者がいると来た。黒歌の指名手配が解除されたのも君の仕業かな?全く、他にもいるなら最初に言っておけて話

だよ」

兵藤一誠の言葉がグルグルと頭の中で回り続け、その場で立ち尽くすしかない幹也。  
しかし

「本当、君さえいなければ朱乃さんは僕の牝奴隷だったのに。」

その言葉だけは、聞き流すことは出来なかった。

「——黙れ下郎。」

気が付けば、幹也は鋒を向けていた。

「貴様が何を考へてるかは知らんがな、それでも、彼女に手を出すのならばその時は容赦なく斬るぞ……！」

「いいのかい？今ここで僕の側につけば君はもつといい思いができるかもしれないよ？」

「結構だ！俺は悔いの無い生き方をすると決めた。お前のいいなりになるつもりは無い！」

その返答に、兵藤は僅かに表情を曇らせ、

「残念だ。まあでも少なくとも今はまだお互い敵対関係にある訳じゃ無いんだ、お互い、味方である内に友好的な関係を築いていきたいものだね。」

それだけを言い残し、兵藤は踵を返し、旧校舎へと戻っていった。

冷たい夜風だけを残して。

「ただいまー」

「お帰りなさい幹也さん。」

ぐったりと帰宅した幹也を出迎えたのはエプロン姿のガブリエルだった。

ガブリエルはそのままソファに倒れこむ幹也を優しく受け止める。

「だいぶお疲れのようですね……」

「ちよつとな……けど、今回の交渉での成果はでかい。少なくとも今までより動きやすくなるはずだ。」

「それよりも私は、幹也さんが無事でいてくれる事の方が大切です。」

優しく、幹也を胸に抱きながら話すガブリエルに、幹也は少し体の力を抜く。

「そうか……ありがとな……」

「お礼には及びませんわ。疲れたのでしょうか？夕食が出来るまで、まだ時間があります。」

「このまま少しお休みになって下さい。料理が出来たら起こしますから。」

「そう、だな。そうさせてもらおうよ……」

重くなる臉を自覚しながら幹也は目を閉じる。

直後にガブリエルは翼を広げ、幹也を繭のように優しく包んだ。

「おやすみなさい。どうかあなたに、安らぎがありますように……」

一方その頃、生徒会室ではソーナとソーナの女王であり、生徒会副会長である真羅椿姫と、兵士である匙元士郎の三人が今回の交渉を振り返っていた。

「彼の手腕は凄まじかったですね。およそ交渉、或いは外交という面でも彼ほどのやり手はそういないでしょう。」

ソーナの言葉に椿姫も首肯する。

「そうですね。加えて戦闘能力も高いと思われます。現に彼ははぐれ悪魔を何体も撃破しているようですし。」

頭が回り腕も立つ。

味方であれば頼もしいが…

(だからこそ扱いが難しい。下手に地雷を踏めば、今の戦力では太刀打ち出来ない…)

ソーナがそう考えていると、今度は匙が口を開く。

「しかし俺としては、兵藤のやつが女王だったことに驚きでしたけどね。だって女王って一番の側近、懐刀って事ですし。」

「確かに。問題はリアスがそれほど彼に傾倒してる事です—— ツ！」

何かが、ソーナの中で引つかかる。

(何？ 私は何かを見落としている!??)

思い出す。

視界が色を失うほどの集中の中で、ソーナは今日の幹也をの言葉を記憶から引つ張り出す。

(そうだ、彼はあの時なんて言っていた?)

引つかかるのはあの場面。

幹也が悪魔の内情に詳しく過ぎると疑念を抱いたあの瞬間。

あの少年はなんと答えた?

『はぐれ悪魔がそんな感じの事を喚いてたんだよ。』

「——なんて事。」

「会長？」

「どうかしたんですか？」

突然顔色を変えたソーナを心配して、声をかける二人。

ソーナはそんな二人に

「やられました……！」

そう告げた。

「どういう意味ですか会長？」

「いいですか二人とも。上位の個体を除いて、はぐれ悪魔は理性を失い、欲望や本能のままに生きています。それは二人も知っていますね？」

ソーナの問いに二人は頷く。

「しかしそれでも、最低限の会話は可能です。でも、」

そこで、わずかに言葉を区切り、ソーナは言う。

「はぐれ悪魔は、主人を殺す、或いは主人の元から脱走した者達です。故に彼らは、かつての身分を一番嫌う。」

だからこそ。

幹也の言葉はあり得ない。

「え、ええと、つまりどう言う事なんですか？」

首をかしげる匙に、ソーナは簡潔に答えた。

「これは推測ですが」

そう前振りした上で、

「おそらく彼は、三大勢力のいずれか、或いは三大勢力全てと通じています」

## ソーナ、始動。

朝の通学路がこんなにも憂鬱だったのはいつ以来だったか？

そんな事を考えてしまうくらいには、幹也の気は滅入っていた。

『女神』に『転生者』：別の転生者は何となく覚悟はしていたけど、まさか神様まで別とは……)

しかし、対処のしようがないのもまた事実。

少なくとも、現状、兵藤一誠は、過激ではあるが、表立った敵対行動はしていない。

(本当に敵対する気が無いのか、或いは尻尾を掴ませていないだけなのか……)

いずれにしても備えは必要だ。

最悪の場合、幹也自身が破滅する事になっても――

(構わない。あの三人が無事ならいい。)

鋭い眼光は、いずれ来る戦いを見据えていた。

「ごめん、月野くん今日放課後空いてるかな？」

昼休み。

屋上で朱乃と弁当を食べていると、申し訳なさそうに木場がそう言ってきた。

「謝るくらいなら、誘わなければよろしいのでは？はい幹也君あーん。」

「朱乃さん、そんなに怒らなくてもいいんじゃないですか？後、今会話するからちよつとだけ待ってください。木場、なんかあつたのか？」

「うん、部長が今日話があるみたいなんだ。ああ、食べながらで大丈夫だよ？」

「別に幹也君は部員では無いのだから、後で伝言でもすれば良いと思いますわよ？はい幹也君、里芋あーん。」

「ちなみに、どんな内容なんだ？朱乃さん、食べますんで押し込まないで下さい、具体的には前歯折れそうだから？」

「ごめん、詳しくは僕も……」

終始申し訳なさそうにする木場に、幹也は了承の意を伝えた。

……朱乃は少し不満そうだったが。

旧校舎の前で木場と小猫と合流した幹也は、部屋へと足を運んでいた。

(さて、今度は何だ？今んところ町で不穏な気配は感じられないし、サーゼクスからも、特に連絡は来ていない…)

となると、いよいよ兵藤が行動を起こしたのか？と、思考を巡らせていると、ある気配に気が付いた。

「……あ？」

「…月野くん？どうし——！！？」

「……これは」

一拍遅れて木場が気付き、更に遅れて小猫も気づく。

「まさかこの距離になるまで気付かないなんてね…」

「仕方ねえよ。こりゃ手練れだ。」

冷や汗を流す木場とは対照的に、幹也は落ち着き払った様子で扉を開ける。

(しかし、何で『この人』がここに来たんだ…?)

その答えはすぐに飛び込んで来た。

「お嬢様。どうか落ち着いてください」

「何と言おうと、私は嫌よ！」

（ああ、忘れてた…）

そう言えば。

リアス・グレモリーは貴族の娘だったと。

つまるところが、

（お家騒動…って奴か…）

うんざりしたように、幹也は溜息を吐くのだった。

「私は嫌よ。望まない結婚なんて！」

「お嬢様、とりあえず落ち着いて下さい。」  
政略結婚。

貴族や王族同士の結婚によく見られる政治的な戦略の一つ。

勢力の増加。或いは自家、自国の存続をかけて行うそれは、しかし悪魔という種族にとつては別の意味も含まれる。

(純血種の存続。想像以上に、先の大戦は深刻なダメージをもたらしたと見える…)

激昂するリアスに、宥めるグレイフィア。そして、その様子を遠巻きに眺める眷属達と、幹也。

部室内の現状は上記の通り、混沌としたものだった。

「その辺りにしてはどうですか？」

「一誠……」

二人の言い合いに割り込んだのは、やはり兵藤一誠だった。

「部長が嫌がっていますし、このままじゃ埒が開かないでしょう？」

にこり、と愛想よく、しかしどこか軽薄な笑みを浮かべてグレイフィアに話しかける兵藤。

そこに、一瞬違和感を感じた。

(なんだ？この感じ、なんかの魔術行使に似た感覚だ…)

グレイファイアも感じ取ったのか、僅かに身構えた時だった。

『!?!!?』

直後、部室に突如として魔方陣が現れ、炎が立ち上ったのだ。

「相変わらず嫌な空気だ…人間界は…」

現れたのは一人の男。

どこかホストを思わせるスーツを着崩した、軽薄そうな雰囲気男性。

(なるほど…この炎にあの魔方陣。縁談の相手は…)

「よお、会いに来たぜ?愛しのリアス。」

「ライザー、フェニックス…!!?」

リアスの婚約者。ライザー・フェニックスだった。

「何の用かしら?」

「そうカツカすんなよ。婚約者なんだからさあ」

「貴方と結婚する気は無いわ。」

「いつまで駄々をこねてるんだ?お互いもう子供じゃないだろう?」

「気安く話しかけないで!!?」

先程からこの調子で会話が一向に進まない。

かれこれ十五分程経過している。

そろそろ本気です帰ろうか迷っていると、ライザーと目が合った。

「おいリアス。何故汚らわしい人間がここにいる?」

「ぶっちゃけそれは俺も同意見なんで、帰って良いですか?」

敵意剥き出しの視線と発言だが、流れるには悪くないので便乗してこの場からの離脱を図る幹也。しかし

「駄目よ。」

リアスによってその目論見は阻まれる。

「理由を聞いても?」

「ええ。ライザー、貴方と私の婚約問題を解決するための方法として、お父様がゲームでの決着を考案したわね?」

「ああ、レーティングゲームで決めろとの事だ。」

レーティングゲーム。

悪魔同士が、己の眷属と共に戦う、半ば娯楽になりつつある競技の事である。

(…おい待て。この流れ、まさか俺を呼んだ理由は…!)

「このゲームは非公式。つまりある程度の融通は利く。私は助っ人として、そこに居る月野幹也の参戦許可を要求するわ！」

高らかに。それでいてどこか勝ち誇った顔でそう言い放つリアスに、幹也は顔を顰める。

(このバカ女…何ほざいてんだ?)

内心で悪態をつきながらも、黙っていては事態が悪化すると考え口を開く。

『使用人殿』今言った事は可能なのか？」

「——、ええ、まあ確かに、通常なら認められませんが、このゲームは非公式。ある程度の要望は通ります。ましてお嬢様はゲーム未経験者。ハンデや助っ人程度ならば…」

「可能、か…」

困った事に、グレイフィアから切り崩すのは難しいようだ。

(サーゼクスめ…過保護にも程があるぞ…!)

後で文句の一つも言ってやろうと、幹也は舌打ちした。

「フェニックス殿はよろしいので？悪魔同士の戦いに、人間が割り込んでも」

「俺は一向に構わん。弾除けが増える程度だろうか？」

切り口を変えてみたが、これも失敗。

となると道は一つ。

「幹也、諦めなさい？ 貴方は参加するしかないのよ？」

「断る。」

真正面から拒否するしかない。

『……………』

その場にいる全員が沈黙した。

まさかここまで堂々と言い切るとは思ってもみなかったのだろう。

あのグレイフィアですら、口をほかんと開けている。

「貴方、自分の立場をわかっているのかしら？」

「勿論。協力者であり、部外者だ。」

鋭い口調のリアスに、幹也は全く物怖じせずに取り返す。

「何か勘違いしてないか？ リアス・グレモリー。俺が協力するのはあくまで領地運営に  
関してだけだ。この町でのトラブルなら話は別だが、今回はただの内輪揉め。悪いが契  
約外だな。」

「……………力尽くでも協力させると言ったら？」

殺気すら纏い出したリアスの言葉は、しかしこの場において悪手だった。

「成る程。自分の望みの為に人間を脅す……と。使用人殿？ これ、領主としてはどうなの  
？」

「……褒められた行為ではないですね。」

「だろうな。この町に住む一人人としては——即刻冥界に帰って結婚でもなんでもして欲しいところだんだけど?」

「!!?」

地雷を踏んだ。

そう気付いた時には遅かった。

リアスは慌てて弁明する。

「ま、待つてちようだい!今のは、そう、今のはものの例えよ!」

「………そうか。では今回限りにしてくれ。こっちもそんな冗談を言われては肝を冷や

すからな?」

(よくもまあ、ぬけぬけと言えるものですね……)

あまりにもわざとらしい言い草に内心呆れるグレイフィア。

ここままで度胸の据わった人間も中々いないものである。

このまま終わるかと思いきや、しかし今度はライザーが立ち上がる。

「おい人間!!?俺のリアスに随分なことを言ってくれるな?口の聞き方を教えてやろうか?」

俺のリアス、という部分を強調した辺り、あからさまな好感度稼ぎなのだろうが、し

かし兵藤一誠に傾倒している今のリアスには逆効果である。

「落ち着いて下さいよフェニックス殿。自分はただ協力者として苦言を呈したただけなのですが、何か気に障りましたでしょうか？」

「ああ、お前の存在が気に障る!!?はつきり言つて目障りだ!!?」

「成る程。つまり、個人的な怒りで、リアス・グレモリーの領民を勝手に殺すと?」

幹也の言葉に、今度はライザーが固まった。

「グレモリーも大変ですね?よもやこんな暴力的な男と結婚なんて。ああいや、ここで俺が焼かれれば、その結婚も無しになるのか。何せ勝手にグレモリー領で殺人を行う粗暴者。そんな爆弾みたいな男に、娘を嫁がせる家なぞありませんからね?」

「貴様……」

今すぐにも目の前の人間を焼き殺したいところだが、そんな事をすれば、政治的な問題に発展する。ましてグレモリーは魔王を輩出した家。

勝ち目など、火を見るよりも明らかだった。

(相変わらず、ゾツとしますね……)

言葉だけで場を制する幹也に、グレイフィアは僅かに冷や汗を流す。

思いつくのはかつてのサーゼクスと、幹也の交渉。

あの魔王を手玉に取った、幼い少年の姿。

(変わっていない。彼の手腕は、並みの政治家などでは歯が立たないでしょうね……)  
この少年が敵で無くて良かったと、グレイフィアはそつと息を吐くのだった。

結局、幹也はレーティングゲームには参加せず、リアス側には、当初予定されていたハンデの、十日間の準備期間が用意された。

(もつとも、龍王や天龍がいる時点で結果は見えてるようなもんだけどな……)

校舎を歩きながら、幹也はリアスとの会話を思い出す。

(おまけに町ほっぽって十日間の合宿か……。頭痛くなるなあ……)

足を止め、幹也は扉をノックする。

それほど間が開かずに、中からどうぞと声がした。

幹也は声に従い、扉を開けて中へと踏み入る。

「生徒会室へようこそ、月野君。」

「いきなり押しかけてすまない。」

幹也を迎えたのは、生徒会長であるソーナと、その眷属達である。

十日間、この町を離れるリアス達に代わって町の管理や見回りをするソーナ達と、今後の方針について話し合いに来たのである。

「とりあえず、さっさと決めてしまおうぜ。俺が担当するパトロール区画と、いざという時の連絡手段と……」

「その前に。少しよろしいですか？」

早速本題に入ろうとする幹也を、なぜか止めるソーナ。

「どうかしたか？」

「いえ、せっかく余計な横槍も無しに貴方と会話ができるんです、事務的な物だけでは、いささか味気ないと思ひまして。」

意外、というべきか。

ソーナのこの発言に、少なからず幹也は驚いた。

冷血な仕事人間、とまでは言わないが、しかしこういった、いわゆる遊びのようなもの、仕事が終わった後にするような公私をしっかりと分けた女性だと考えていたのだ。

(いや、リアス・グレモリーや兵藤一誠を『余計な横槍』という辺り、彼女もストレスが

溜まっているのかもな…)

ある意味、一番割りを食っているのは彼女なのかもしれない、と考えて幹也はソーナに同意する。

「そうだな。たしかに親睦を深めるのは大事だ。それで、何を話す? ご期待に添えるかはわからないけど、これでも話の種は結構多いほうだぜ?」

「そうですね…言われてみると会話に困りますが…では、これなどどうでしょう?」  
この時。

ソーナの僅かでも付き合いがあるならば。

恐らくは気付いた筈である。

彼女の言動が、少し『わざとらしい』事に。

「チエス、か?」

「はい。ルールはご存知ですか?」

「ああ、つっても大して強くないぜ?」

「構いません、あくまで親睦を深めるためです。勝敗では無く、楽しむ事を主体にしましょう。」

——この対局が、幹也を致命的に追い詰める事になる。

## チエツクメイト

コトン、と音が響く。

チエスの駒を動かす音だ。

生徒会室で、幹也とソーナはチエスに興じていた。

一見するときにこやかに見えるが、しかし周囲の眷属達は驚愕していた。

(会長と、互角……!??)

ソーナ・シトリーはチエスの名手である。

それこそ、自らの知略を鍛えるための思考鍛錬として、チエスを嗜んでいる節もある。その実戦的な戦略の前に敗れ去った者は決して少なくはない。

だが、目の前にいる少年はソーナ相手に全く引けを取らない程の戦略で、互角に渡り合っている。

(すごい……けど……)

同時に。女王であり、副会長である椿姫は一つの確信があった。

(恐らく、この均衡はそろそろ崩れる。そして『本命』も、まもなく仕掛ける筈。)

全員が、張り詰めた空気に緊張していた。

(何だ? やたらピリピリしてるな…)

その空気の変化を、幹也も感じ取っていた。

しかし、何が原因かわからない以上、迂闊な発言も出来ず、ただ首をかしげるばかりだった。

「中々やりますね。正直、ここまで長丁場になるとは思いませんでした。」

そんな中、ソーナは感心したように幹也に話しかけた。

「お互い、まだそんなに駒は取れてませんし、少し消極的過ぎましたかね?」

「勘弁してくれ…こつちもなんとか凌いでるんだ。そつちはまだ余裕ありそうだぞ?」

「お互い様では?」

軽く笑いあいながら、二人は対局を再開する。

「時に…月野君に尋ねたい事があるのですが。」

眷属全員が表情を硬くする。

(…来た！)

椿姫はついに来たかと、身を引き締め、匙はいつでも動けるように少し足を開く。

「……………？何だ？」

その様子に気付きながらも、とりあえず害はないと判断し、ソーナに続きを促す。

「月野君、貴方は何者ですか？」

ソーナはポーンの駒を動かしながら、そう聞いた。

「」。

一瞬、しかし確かに言葉に詰まる幹也。

(…疑われている。或いは、気付き始めている？)

ソーナが抱いている疑念はどっちか、まずそこを明らかにしなければならぬ、と、幹也は立ち回りを考える。

間者か、監視か。

問者、他勢力からの回し者だと疑われているならば、幹也はその疑いを全力で晴らさなくてはならない。確かに三大勢力のパイプ役である以上、悪魔以外の勢力とも当然繋がっている。しかしそれは敵対では無く同盟の為。

故に、幹也の失敗で三大勢力の間に亀裂が入る事は避けなくてはならない。

しかし、監視だと疑われているならば、まだ余裕がある。しかしバレてはいけない事に変わりはない。下手をすれば、パイプ役を殺害する事で、三大勢力間の連携を乱されるおそれもある。何より、この町が本格的な戦場になる事は幹也自身が望んでいない。

「何者、か。中々深い問いだな。どんな意図でそんな質問をするんだ？」

手探りの戦い、加えて相手はあのソーナ・シトリー。

過去最悪の戦いを前に、幹也は冷や汗をかきながら応戦する。

「うまくポーンをブロックされてしまいましたね…。どんな意図、ですか？」

幹也の返しに、ソーナは盤面を見ながら思索する。

（ふむ…この返し。中々返答に詰まりますね…）

この言葉。

遠回しに、お前は俺を疑っているのか？と聞いているようなものである。

そしてこれは、ある意味ピンチである。

（返答を誤れば、最悪皆殺しですね…）

頬を汗が伝う。

ソーナが考えたパターンは三つ。

幹也が悪魔と繋がっている可能性。

幹也が三大勢力全てと繋がっている可能性。

そして最悪なのが…

(もしも彼が、悪魔以外と繋がっていた場合…ですね。)

ここで迂闊には踏み込めない。

ソーナはブロックしているポーンをルークで取りながら、言葉を返す。

「言い方が悪かったですね。こう言い換えましょう。貴方には仲間がいるのでは無いのですか？」

そのルークをビショップで取り、幹也は切り返す。

「根拠は？」

再びポーンをブロックされたソーナはその場を諦め、側面からポーンを進める。

「先のリアスとの交渉の際、貴方は眷属の立場の呼称をはぐれ悪魔から聞いたと言いました。ですが、はぐれ悪魔はかつての己の身分を好まない。それは彼らにとって忌むべき過去ですからね。」

「つまり、俺には悪魔、或いは悪魔に詳しい知り合いがいる…と。」

進められたポーンをナイトで取りながら、幹也は内心舌打ちした。

(くそ…迂闊だったか…つまんねえボロ出しちまったぜ…)

「はい。そう考えると、色々と納得がいきます。」

ナイトをビシヨップで取りながら、そう首肯する。

「一概に、はぐれ悪魔って言っても、悪い奴ばかりじゃ無い。俺がそういう連中から話を聞いた、つて事もあるんじゃないのか？」

ビシヨップをルークで取り、そう問いかける幹也に、ソーナは一切動揺しなかった。

「ふふっ」

「何がおかしい？」

いきなり笑い出したソーナに首をかしげる幹也。

「ああ、すみません。ですが、今の言い方だとまるで」

ソーナはブロックしていたビシヨップをクイーンで取りながら

「『そんな可能性もあるぞ』と、疑念を持たせる為に言ったように聞こえてます。」

「………？」

見抜かれた。

幹也の背中に冷や汗が流れる。

「穿ち過ぎだよ、それは。」

クイーンの進路を塞ぐ形でポーンを配置しながらそう返す。

表情は平静を装うことが出来ているのは、もはや奇跡に近かった。

(やばい…、本当にやばい!!?このままじゃ、俺の正体が露見する!)

頭をフル回転させて、打開策を思案する。

(落ち着け。冷静になれ!ここまで追い詰められたのは、確かに俺のミスだ。

けど、だとしても、俺の正体に当たりが付いているならここまで消極的な追い詰め方はしない筈!多分向こうも綱渡りに近い感覚の筈だ!)

逆転の目はまだある。

そう判断した幹也は、ソーナの表情を見て、その考えが、

「——あ。」

間違いだったと知る。

見れば、ソーナは薄く、本当に薄くだが、笑っていた。

(なん、だ?何で笑って…)

そこで、幹也は先の会話の内容を思い出す。

(つあ、ち、がう?こいつ、そうかこいつツ!?)

(気付きましたね…?)

幹也の反応を見て、ソーナは少し息を吐く。

呆れ、では無く、緊張がほぐれたからだ。

(先の発言。普通私があそこまで踏み込んだ言葉を吐けば、敵対勢力なら即座に攻撃してくる筈。なのにそれをしなかった。)

(終えていた。あの時、こいつはもうその綱渡りを渡り終えていた！)

(しかし、悪魔単一の勢力に属しているなら、逆に口が固すぎる。喋り過ぎは愚行ですが、情報を渡さな過ぎるのも返って逆効果。つまり)

(見抜かれた。応手を間違えた!!?こいつは)

(月野幹也は三大勢力のパイプ役。)

(俺の立ち位置を完全に把握した!!?)

詰み筋は見えた。

であればここから先は千日手。

決められた手順を終えるか、凌ぐか。

「そうですね。確かに、穿ち過ぎかもしれません。では、穿ち過ぎついでに、私の突飛な考えを話しますね?」

進路を塞ぐポーンをクイーンで取りながら、ソーナは話し始める。

「数年前。貴方は三大勢力の誰かに密命を受けてここに来た。」

キングを守るようにナイトを配置しながら続きを促す幹也。

「密命の内容は…：そうですね、領地運営に関する事…：いえ、今のリアスが更迭されていないところを見ると、リアスのサポートの方がメインでしょうか。」

ナイトを無視して、空いた進路をポーンに譲るようにクイーンを動かす。

その間に、距離を置くようにキングを避難させる。

「その後、貴方ははぐれ悪魔を狩りながらその役目を果たし続けた。ですが、ここにはぐれ墮天使と、それに騙されたシスターが絡んだ事で、貴方の存在が龍王ティアマットと赤龍帝に捕捉された。」

ポーンを進めて、ソーナはポーンをプロモーションさせる。選択した駒はクイーン。幹也はキングを下げようとしたが、自軍の駒が邪魔で動かせない。

故に、ナイトを壁のように配置。

「なんとかその場を脱した貴方を、しかし兵藤一誠は追尾。どのタイミングかはわかりませんが、これで正体不明のサポーターは貴方だと判明した。」

プロモーションしたクイーンで、まずナイトを撃破。

「その後、自身の立場を明かすわけにはいかない貴方は、リアス相手に自身行動制限に口を出さないように交渉。ですが、貴方が本当に後ろ盾も勢力のしがらみもない立場なら、そもそもこの交渉は不要なんです。昔ならばいざ知らず、今のリアスを無視したところでも誰も咎めませんから。」

プロモーションしたクイーンを、自軍のクイーンで撃破する幹也。

しかし返す刀で、ソーナのクイーンが、それを更に撃破する。

そして。

「つまり、貴方は交渉の必要があつた。公に領地運営に関わるための口実が必要になつた。これが単一の勢力、悪魔に属するだけならややこしい口実は圧力でとうとでもなる。しかし敵対勢力ならば、そもそもここまで協力する義理は無い。——つまり貴方は、三大勢力を政治的に繋ぐ、パイプ役にして実働隊。」

この駒の配置は。

「チェックメイト——如何でしようか？」

## 覚悟

「……………」

沈黙が、場を支配する。

既に終わった勝負、詰んでしまった盤面を前に、幹也はただ佇んでいる。

その様子を、ソーナを含めた眷属達は固唾を飲んで見つめていた。

「……………」一つ、聞きたいことがある。」

一瞬か、或いは一時間か、どうあれ時間の感覚がなくなるような静寂の後、

幹也は重い口を開いた。

「何でしょう?」

「もし仮に、あなたの読みが僅かでも外れていたら、今、あなたの首は俺の足元にあったかもしれない。その可能性を、考慮しなかったのか?」

「当然しました。そしてその上で、わたしはこの場を設けたのです。」

「……………」何?」

淀みなく即答したソーナに、幹也は思わず首を傾げる。

今の答えをそのままの意味で受け取るならば、彼女は、

「死ぬ気だったのか……!?？」

「その可能性も覚悟した、というだけです。」

涼しい顔で答えるソーナに、今度こそ幹也の表情は固まった。

否、よく見れば眷属達の表情も、どこか苦虫を噛み潰したようだ。

「そこまでして、何故……!?？」

困惑した幹也に、ソーナは何でもないとように答える。

「それが、上に立つ者の務めでしよう。」

その一言で、幹也は全てを察した。

彼女が何を思い、この場を設けたのか。

もし、今ここで、たとえば如何なる形でもソーナ・シトリーが消息を断てばリアス・グ

レモリーや、彼女の家族は必ず気付く。

そうなれば、まず最初に考慮されるのは失踪では無く、拉致、或いは殺害された可能

性だ。

そうなると真つ先に浮かぶ容疑者は誰か。

他でもない幹也自身である。

だからこそ彼女は今回の作戦に踏み切った。

その身命を賭して、未来の不穏分子を摘む為に。

「悔っていた訳では無い。」

だが読み違えた。

彼女の意思を、

彼女の責任感を、

そして、彼女の覚悟を。

(いや、何を言っても言い訳だな。)

幹也は椅子から立ち上がり、その場で片膝を付いた。

その行動に、全員が驚愕する。

「見事だ。その気高い覚悟に感服する他ない。そして非礼を詫びる。俺は貴女を見誤っていたようだ。」

静かに、一切の淀みなく、幹也は謝罪する。

その言葉には、確かな敬意が籠っていた。

「あ、頭をあげて下さい、そこまでしてもらうことは…」

「悪いな、これは俺の主義の問題だ。筋は通さなきゃならん。」

頑として頭を上げない幹也と戸惑うソーナ、そしてそんなソーナと一緒に慌てふためく眷属達。

だからこそ、気付かなかった。

「へえ、良い子じゃない☆」

「ああ、だからこそ、私は彼を信用しているんだ。」

『!??!』

横からかけられた声は二つ。

一人は間延びした女性、もう一人は穏やかな青年の声。

それは、

「お姉様…?!?!」

「サーゼクス…?!?!」

四大魔王の内の二人。

サーゼクス・ルシファーとセラフォル・レヴィアタンだった。

「何で…」

「いきなり実家の近衛兵に駒王での待機命令なんか出すんだもん、心配で飛んで来ちゃった☆」

どれだけおちやらけていてもやはり魔王。

それなりの耳目はやはり持っているという事なのだろう。

「サーゼクスは…?!」

「現状、君の正体を明かしうる最も身近な人物はだれか…、考えついた所で今回の彼女の行動だ。すぐに兵を引かせて、私が事情説明しに来た所だ。」

「そうか…」

すると、幹也は刀を地面に置き、再び片膝を付く。

「幹也君？」

その行動に面食らったのか、サーゼクスは呆けた声を出してしまう。

「あんたに与えられた使命は立場を明かさず、リアス・グレモリーのサポートをこなせというものだ。だが、こうして正体がバレた以上、その任務は失敗。お咎め無しという訳にも行かん。」

「幹也君…」

「だが、これまでの働きは無駄では無かった筈だ。故にどうか、俺の命一つで済ませてほしい。」

その言葉に、サーゼクスは一步踏み出し、幹也の頭を鷲掴みにする。

「わかった。だが命は取らない。君の力はまだ必要だ。故に、私が今まで生きて来た中で受けた、一番の苦痛を君に与える。」

「わかった。」

あまりにも冷淡な声音と濃密なオーラに、幹也以外の全員が息を呑む。

そして、

「これが私が受けた中での一番の苦痛、グレイファイア直伝——アイアンクローだ！」  
「え、ちよ、待て、いだだだだだだ！頭皮取れる頭皮取れる！」  
想像以上に、ほんわかつた絵面だった。

「はい終わり。今後ともよろしく頼むよ、幹也君。」

幹也の頭から手を離し、にこやかに告げるサーゼクス。

対して幹也は、少し涙目だ。

「……本当にこんなもんでいいのか？」

「こんなもんって…幹也君、本家のアイアンクローを受けても同じ事が言えるのかい？」

「アンタ普段どれだけのもの喰らってんだよ!?？」

少し青ざめた様子のサーゼクスを見るに、本家の威力は今の比では無いのだろう。まさしく鬼嫁である。

「幹也君、我々の関係は上下では無い。対等だと私は考えている。故に君を罰する権利など、本当は無いんだ。」

「……けどよ」

「確かに、今後の三大勢力の行く末は君の働きにかかっている。けど、君だけに背負わせるつもりは無い。それは君を知る者全ての総意だ。故にどうか、一人でなんでも背負い込まないでくれ。君が死ねば、悲しむ者は大勢いる。それともあの三人は、君にとって取るに足りない存在かい？」

「断じて違う。」

即答だった。淀みも迷いも無い答えに、サーゼクスは満足そうに頷く。

「だったら尚のこと、君は自分の事を大切にしなければならぬよ。彼女たちの為だね。」

そう締めくくり、サーゼクスは魔方陣を足元に展開する。

「じゃあ、私はそろそろ行くよ。君達、悪いが、今日の事は内密に頼む。時期が来るまで、誰にも言わないでくれ。それと、場合によっては幹也君のサポートを頼むかもしれないな

い。必要な事があれば言ってくれ。」

「はっ、」

サーゼクスの指示に、ソーナ達は即座に頷く。

「では幹也君、また。」

「ソーナちゃん、また来るからね☆」

そして今度こそ、二人の魔王は冥界へと帰って行つた。

かくして、幹也の正体を巡る一連の騒動は、人知れず、静かに終息したのであつた。

## 英霊顕現

## 争乱の足音

その一報は、あまりにも急だった。

「聖剣が……!?」

通信魔術越しにそう聞き返した幹也の言葉に、ミカエルは重々しく頷いた。

『ええ、情けの無い話ですが……』

聖剣。

かつてブリテンの騎士王が持っていた星の聖剣。

勝利を約束されたその黄金の剣は、数々の争乱を経て、七つに別たれた。

そして七つの破片を新たな剣として再構築した物を教会が管理していたのだが……

「奪われたのは何本だ？」

『以前強奪された一本と担い手が見つかった物を除けば……四本です。』

「ごっそり持っていかれたな……犯人の目星は？」

『それについては俺から言おう。』

次に口を開いたのはアザゼルだった。

「……墮天使か」

『ああ、俺も焼きが回ったな。部下の手綱一つ、握れねえとは……』

苦虫を噛み潰したように吐き捨てるアザゼルに、幹也は質問する。

「人数は何人だ？」

教会への殴り込みに、聖剣の奪取。

恐らくはかなり訓練された集団と判断した幹也の質問に、しかし返って来たのは意外な答えだった。

『一人だ。』

「……な、」

一瞬、言葉に詰まる。

一人。

つまりこれ程大胆かつ大規模な犯行を単独で行ったのだ。

個人としての実力はあまりにも飛び抜けている。

「……誰だ、そんな馬鹿げた事をやったやつは……!?？」

唸るような問いに、アザゼルもまた重々しく返す。

『コカビエルだ』

「大物だな……」

コカビエル。

聖書にも名を残す、強力な墮天使の一人。

戦いに取り憑かれた、悍ましき御使の成れの果て。

「んで、対処はどうすれば良い？」

『コカビエルに關してはもう酌量の余地は無い。きついかもしれねえが…』

「…わかった。俺が始末する。」

幹也の返答に、アザゼルは重く頷く。

「ミカエル、教会の動きは？」

『残りのエクスカリバー使いの二人を投入したそうです。ですが…』

「戦力としては心許ない、か…わかった。上手くフォローするよ。それと、まだ『あの事』は言っていないんだよな？」

幹也の問いに、ミカエルは目を伏せる。

『はい、まだ…』

「そうか…仕方ないとはいえ、いつかツケは回ってくる。頭を下げ、ぶん殴られる覚悟はしておけよ。」

『重々承知しています。』

その後、いくつかの話をして、通信を切り上げる。

幹也は自室からリビングに降りると、黒歌、朱乃、ガブリエルの三人に経緯を話した。「そうですか…コカビエルが…」

三人の中で一番シヨックを受けたのはやはり、一番付き合いが長かったガブリエルだ。

朱乃はあまり話した事が無く、黒歌に関しては接点が一つもない。

「それと、今回に關しては、行動の大部分を現場の判断に任せるそうだ。場合によっては俺たちの素性を明かすことも構わないとよ。」

それは、つまり今までの戦いとは一線を画すという事。

かつて無い熾烈な戦いを予感し、四人は表情を引き締めるのだった。

——夢を見る。

そこには何もなくて、自分以外の全てが純白に塗りつぶされている。

——前を見た。

一人、顔立ちの整った見覚えの無い青年が、見覚えのある剣の前で何かを喚いている。

——足を運ぶ。

一步、また一步。しかし届かない。手を伸ばせば届きそうなその距離が縮まらない。

——声を出す。

お前は誰だ、何故ここにいる。そんな問いを投げかけるようとしても、声が言葉にならない。

——けれど、この感情は理解できる。

ああ、これはきつと憧憬だ。私はこの目の前の見知らぬ青年に、追いつきたいと心から願っている。

——目が覚めた。

窓の外を見ると、なんだか殺風景な景色が広がっている。

それが空港の滑走路だと気づくのに、一秒もかからなかった。

「あ、やっと起きた！もう、そろそろ行くわよー！」

「……ああ。」

席から立ち上がる。

彼女達は任務を果たす為にこの国に来た。

いや、そう思っているのは自分だけかもしれない。

横にいる小うるさい相棒は昔の幼馴染に会う事で頭がいつぱいのようだ。

内心、溜息をつく。

本当にこんな調子で大丈夫なのだろうか。

(いや、私も人の事は言えないな)

責任感はある。信仰心も、任務を終えれば、達成感だつてつてちやんとある。

けれど、それだけしか無くて。

それだけでは何故だか足りなくて。

ただ、憧憬に向かって走れない自分が、酷く窮屈で。

(——なんなんだろうな、これは。)

その答えが、この任務で見つかるような予感が、少しだけある気がして。

(勘違いじゃ無ければ良いのだが……全く、剣を振るう身で、邪念が多いな、これは……)

彼女——ゼノヴィア・クアルタは、そんないつも通りのまともでない思考に、意味の無い自嘲をしながら目的地へと歩をすすめるのだった

## 雨宵の死闘

雨の中、金属音が鳴り響く。

幾度と無く火花を散らす二つの剣。

狂気と憤怒、聖剣と魔剣が雨粒を吹き散らしながらぶつかり合う。

そんな中、魔剣を振るう金髪の青年——木場裕斗は、自らの復讐心が再燃した理由を思い返していた。

きつかけは兵藤家に集まって行つた部活動で見た一枚の写真だった。

聖剣。

かつて己から全てを奪つた、忌々しい剣。

その写真を見た時、木場は自らの在り方を思い出したのだ。

それからの木場は日に日に自分の中の炎が内側から身を焦がしていくのを感じていた。

同時に、日常への鬱陶しさも。

「どうしたんだい、木場？僕でよければ力になるうか？」

うるさい。女を貪る事しか脳がない奴が。

「どうしたの裕斗？貴方最近変よ？」

うるさい。王の責務を碌に果たさず、男に入れ込む女が。

うるさい、うるさい、うるさい、うるさい。

何もかもが鬱陶しくて、振り切るように夜の中へと駆け出した。

降り注ぐ雨粒が、余計に苛立ちを募らせる。

このまま全てを置き去りにして、走り去ってしまったらどんなに楽か。

理性を飛ばして、ただ憎悪に身を委ねて剣を振るえればどれ程良いか。

けれど、脳裏を掠めるのは死んでいった仲間の顔。

そして、自分の身を案じてくれていた、白い後輩の女の子の姿だった。

「アレアレエ〜!!? ムカつく優男がいると思つたらいつぞやの悪魔君じゃないデスカあー!!?」

雨音に負けないくらい耳障りな声が正面から響く。

見ればそこにはいつか見たはぐれ祓魔師である、白髪青年が立っていた。  
名は確か…

「フリード、セルゼン…!」

「そうそう!クソ悪魔にしてはいい記憶力してるじゃないですかア〜!」

フリードの軽口を無視し、木場は彼の右手を注視する。

「その剣…」

「これ?すごいっしょ!?」エクスカリバー・ラビッドリイ天閃の聖剣っていうスンバラしい武器な訳よ!!?」

最早言葉は要らなかつた。

標的へ向けて、籬の外れた魔剣使いが解き放たれた。

騎士という駒の特性は圧倒的な速度、これに尽きる。

速度をつけて正面からの突進、或いは攪乱して死角から攻撃など、その戦術の幅は広い。

この時の木場は、怒りと復讐への執念が頭を支配していたとはいえ、動きに精彩を欠いていたかと言えばそうではない。

だというのに。

(押し負ける……っ！)

力に差があるわけではない。

技量が極端に離れているわけでもない。

「オラオラア!!? さっきまでの威勢はどうしたんだよクソ悪魔ア!!?」

(速い!)

速度の差。

自身の本領となる領域で敗北したのは初めての経験だった。

「くそッ!」

悪態をつきながら横薙ぎに剣を振るう。

しかしそれは虚しく空を切る。

向こうの速度の方が上な以上、間合いの取り方に明らかに差がでる。

加えて、一撃離脱という極めて単純な戦術を取って来るあたり、態度の割に戦い方に

遊びがない。

おまけに聖剣の性質上、掠っただけで致命傷になりかねない。

(なんて厄介な……!)

「ほーら、そろそろヤっちゃうよん!」

言葉と共に大きく踏み込むフリード。

このまま貫えれば間違いなく即死。しかし同時にチャンスでもある。

(この大振りに、カウンターを合わせる！)

袈裟に振るわれる一撃を受け流し、そのまま剣を持つ右腕を斬り落とす。  
頭で描いた通りに体が動く。

しかし、

ドダン!!?

という音と共にまたも剣が空を切る。

「な……」

「ざぁーんねん!!?こつちだよお〜!!?」

声は後ろから。

何故、と思うより早く答えは出ていた。

(あの音!地面と壁を蹴って跳んだのか!!?)

天閃の聖剣の性質は速度の上昇。

フリードはそれを利用し、木場の魔剣を回避する為に横に跳び、そのままの勢いで壁を蹴り、三角飛びの要領で背後に回ったのだ。

「ほーら、おしまい!!?」

対処が間に合わない。

防衛も回避も不可能。

フリードの腕から考えて、仕損じるなどという奇跡はまず起きない。

故に、敗北という結末は必定だ。

(ちくしよう…)

終わる。

何も成せず。

(ちくしよう)

負ける。

何も出来ず。

(ちくしよう!!?)

死ぬ。

何も掴めぬまま。

(ごめん…みんな…)

そして剣は

ガキリ!!?

という音と共に止められた。

「え……」

「あ?..」

煌々と輝く剣を止めるのは純黒の刃。

ともすれば夜、或いは影そのものと見紛うその出で立ちを、木場は知っていた。それは気怠そうに口を開く。

「夜中に大声で喚いてんじゃねえよ。近所迷惑だろうが。」

——月野幹也。

かつて五大龍王の一角を退けた男の参戦であつた

## 復讐の在処

向かい合う二つの視線。

片や聖剣を担うフリード・セルゼン。

片や神刀を携える月野幹也。

「なあんだテメエ？クソ悪魔に与するなら人間でもバラすつすよお？」

狂気と殺意に満ちたその眼光を、

「……………うっせ」

面倒くさそうに受け流す幹也。

直後に剣が弾かれる。

甲高い金属音が雨音と共に響き渡る。

（おお!?？なんだこいつ、俺様の聖剣を手首のスナップだけで弾きやがったあ!??）

「おら、行くぞ。」

黒刀が胴体目掛けて横薙ぎに振るわれる。別段特筆する技巧はないが、しかしそれでも、その鋭さは木場の比ではない。

（僕の剣速より、速い!）

それは、鍛え上げられた剣士の目をもつてしても霞んで見えるほど。

「うあだあ!？」

驚愕にまみれた声を上げながら、フリードはしかし辛うじて刃を防ぐ。

しかし当然ながら、一撃で幹也が終わらせる筈もなく、上下左右、様々な方向から斬撃を放り込む。

宵闇を斬り刻むかのような太刀筋に、木場は一瞬、呼吸を忘れた。

(すごい…)

弾かれる雨粒は、虚空に斬撃の軌跡を描く。

舞い散る火花はこの世で最も物騒な星空そのものだ。

(ダメだヤベエ。これは今のままじゃ勝てねえ！)

狂気に満ち溢れながら、しかしフリードの思考は冷静に目の前の脅威を捉えていた。

撃破は不可能。

となると取りうる手段は撤退のみ。

即座に思考をまとめたフリードは大きくバックステップ。

そしてポケットに入っていた閃光弾を取り出す。

「ここは引かせてもらいやす!!ハイチャラ——」

ダンッッ!!

と、音がした。

音源は幹也の右足。

フリードが閃光弾を使うより早く、幹也が踏み込み、フリードの左腕を掴んだのだ。

「逃がさねえ……！」

万力のような握力に、フリードの左腕が軋み出す。

「オイマジか……!?!」

「寝てろ……！」

フリードの鳩尾に鈍い痛みが走る。

幹也が刀の柄の部分をめり込ませたのだ。

「お、ゲエ……！」

強烈な一撃により、フリードの意識は一撃で沈んだ。

べしやり、と力無く地面に崩れ落ちるフリード。しかし意識を失ってなお聖剣を手放

さないあたり、この男の執念を感じる。

「さて、色々聞きたいことがある。木場、お前も来て——!?!」

直後。

フリードの体が淡く光り出す。

徐々に強くなる光に、木場は身構え、幹也は刀を振り下ろす。

(自爆かなんかか!? どうあれ、発動前に術者を仕留めれば!)

しかしこの時、幹也の考えは外れていた。

振り下ろした刀は硬い音とともに、地面にぶつかり、僅かに火花を散らすのみ。

見れば、フリードの体は消え失せていた。

「やられた…」

自身の意識消失をトリガーにした転移術式。

どうやら想像以上に用意周到な男だったらしい。

「くそ、振り出しか。木場、無事か?」

頭をかきながら、木場の安否を確認する。

「……………」

「木場?」

返答が返って来ない事に不安を覚えた幹也は、木場に近づく。

しかし、その前に木場は立ち上がり、幹也に鋭い眼光を向ける。

「別に、助けて欲しいなんて、言った覚えは無いよ。」

「……………」

自身の言葉に、自己嫌悪しながら、しかし木場は言葉を放つ。

それが自分出来るケジメだと思つて。

「これは僕の戦いだ。君の手は借りない、だから」

「ああ、とりあえず後で話すか。」

一瞬、目の前から幹也の姿が消え失せる。

「え——。」

声を発する間もなかった。

腹部に痛みを感じた瞬間、木場の意識は遠のいていくのだった。

「はっ!?!」

「お、起きたか。」

目を覚ました木場が、最初にめにしたのは、見知らぬ天井だった。

「( )は…」

「俺の家のリビング。」

言われて、木場は思い出す。あの後、幹也によって木場は気絶させられたのだと。

「ほれ、コーヒー。服と体は、魔法で乾かしたから。」

俺じゃ無いけど、とは、心の中で付け足しておく。

「……礼は言わないよ。」

「いらねえよ。こつちも仕事だ。」

「……」

沈黙が重い。

そう感じてるのは、木場だけかもしれないが。

そんな彼の心中を、知ってか知らずか、口を開いたのは幹也だった。

「復讐、か。」

「！」

「調べたよ。聖剣計画。人工的に聖剣に適合する人間を作り上げる人体実験。」

その唯一の生き残りなんだってな、お前は。」

静かに、滔々と喋る幹也に、木場もまた口を開く。

「……そうだよ、僕達は、教会の勝手な都合で失敗作といわれ、廃棄と称して殺された。だから僕は、仲間の無念を——、」

「言い訳だよ、それは。」

斬り捨てるように、幹也は木場の言葉を一蹴した。

「……何？」

「お前はさ、仲間を理由にして、自身の行いを正当化しようとしてるだけ。お前は死んだ

人間に、言い訳してただけなんだよ。」

今度こそ。

木場の理性は吹き飛んだ。

何かを言う前に、魔剣を生成。幹也に向かって斬りかかる。

しかし

「馬鹿。ブレてるよ未熟者。」

あっさりと腕を掴まれ、足払いで地面へと転がり、組み伏せられる。

「くそ!!」

「落ち着けよ、少年。」

上の階で殺気立つ気配を、剣気で抑えながら幹也は木場に言う。

「凶星突かれて怒んなよ。」

「ふざけるな!!僕は言い訳なんてしてない!!」

「だとすればお前の仲間は最低だな。」

「なんだと!?!」

「事実だろ。唯一生き残ったお前の幸せを願うのでは無く、復讐の道に落ちるのを願ってんだろ?どこが優しい仲間なんだ?」

「知ったような口を……!」

「まだわかんないのか？他ならぬお前が、その仲間とやらを貶めてんだぞ!!」  
「……な」

突然口調を荒げた幹也に、木場は思わず動きを止める。

「お前の仲間とやらは、一度でもお前に、自分たちの無念を晴らして欲しいと言ったのか？その一生を復讐に費やして欲しいと言ったのか？」

「それは……」

「お前の仲間は、友達の幸せよりも、自身の憎悪を優先するような奴らだったのか？」  
「違う！そんな事……」

「じゃあ、仲間の無念とやらを口にするな。お前が託されたものは、きつとそんな冷たいものじゃ無いはずだ。」

「――」

「それでも聖剣が許せないのなら、お前自身の怒りで進め。仲間を理由にするな。死人を理由にするな！他人の意思を勝手に語るな!!」

「………僕は」

何かを言おうとして、しかし言葉にならない木場。

そんな木場を見て、幹也はさらに言葉を紡ぐ。

「死者の声はな、よっぽどの奇跡がない限り、届く事は無いんだ。今際の際に何を願って

いたか、何を思っていたかなんてのは、誰にも知りようが無い。」

それは、幹也の奥底から溢れた声だった。

「寂しい、怖い、痛い、助けて、色んな感情が渦巻いて。」

それはあの日、車にはねられた少年の最期の記憶。

「悔しい、辛い、寒い、許して、でも言葉にならなくて。」

それは、唐突に終わりを迎えてしまった少年の末期の思い。

「でもな。」

それは。

「それでも最後に浮かぶのはきつと、大切な誰かの幸せだと、俺は思うんだよ」

彼が最期に願った、届く事のない祈りの言葉。

「俺は復讐を否定しない。けどせめてこの戦いを、修羅の道の一步ではなく、お前がお前の道を歩く為の一步に、胸を張って日が当たる道を歩くものにしてくれねえか？」

「――」。

幹也は木場を放し、リビングから出て行く。

「今日は泊まっていいけ。」

パタン、と扉を閉める音が響く。

ただ一人残された木場は、じっと天井を見つめていた。

夜の町を、睥睨する男がいる。

名をハルパー・ガリレイ。

皆殺しの大司教と呼ばれる彼は、来たる聖剣の復活の前に、胸を躍らせていた。

(もう少しだ、もう少しで我が悲願が——)

「やあ。」

「!?!」

後ろから、声をかけられる。

しかしハルパーには、この声に聞き覚えが無かった。

慌てて振り返ると、そこには黒いローブでは身を覆った何者かが立っていた。

「な、なんだ、誰だ!?!」

「敵ではない、とだけ言っておこう、ハルパー・ガリレイ。」

その、恐らくは男は。

「真の聖劍、その輝きを望む者よ。貴殿の手助けをしてやろう。」  
妖しく、嗤った。

## 彼女の道

フリードとの戦いから一夜明け、幹也は旧校舎にあるオカルト研究会の部室にいた。理由は一つ。今回の事件を收拾すべく、教会から使者が送られてきたからだ。

故に今日は、この旧校舎の部室において、重要な話し合いが行われる、筈だった。

(……………なんだこれ。)

「イツセーくん！久しぶり！」

「ちよつと！私のイツセーにひつつかないでちょうだい！」

蓋を開けてみれば、始まったのは兵藤一誠の取り合いだった。

どうやら教会の使者の一人である紫藤イリナは兵藤一誠の幼なじみだったらしく、顔を合わせるや否や即座に腕を絡め、引っ付く始末。話し合いが始まる気配がまるで無かった。

「……………おい、そろそろ話し合いを始めたいのだが。」

そう切り出したのは幹也ではなく、もう一人の教会の使者である少女。

名をゼノヴィアというらしい。

彼女はうんざりした様子で相方を一瞥すると、もはや引き剥がすのも面倒と感じたの

だろう、幹也へと視線を向け話し始める。

「コカビエルが聖剣を盗んだ話は聞いているな？我々はそれを取り返しに来た。」

「それで、僕たちにはこの件に手を出すなど言いに来たのかい？」

淡々と告げるゼノヴィアに言葉を返したのは幹也ではなく、意外にも兵藤一誠の方であつた。

（驚いた。こいつ話を聞いてたんだな…）

内心わずかに驚きつつ、幹也は会話の続きを目で促す。

「そうだ。上層部は悪魔と墮天使は結託する可能性を考慮している。故に、万が一その兆候が見えた場合、我々は即座に君達を滅する許可も得ている。」

（面倒だな…この一大事に面子だの陰謀だのを持ち込んでる場合じゃないだろうに…）

実際、戦術面から鑑みて結託を警戒するのは間違いではない。

しかしおそらくそれだけではない。

内部の派閥争いのような物も関係しているのだろう。

（神話の怪物と聖剣相手に送ってきたのはただ二人。加えて悪魔との連携…とまではい  
かなくとも、参戦すら許さないとはいな…保身優先でもやり過ぎだ。この事件、もう一捻  
りあるのか…？）

そもそも根本的に聖剣を盗んだ理由すら明確では無いのだ。

迂闊に踏み込んだ先が伏魔殿という事もある。

「なるほど…話は分かったよ。」

その話を聞いた兵藤一誠は別段訝しむ様子もなく頷いた。

まるでこの展開が分かっていたかのように。

「……随分物分かりがいいんだな？」

「教会が悪魔を警戒するのは当然だよ。」

けれど、とそこ兵藤一誠は言葉を区切った。

そして直後に、僅かだが纏う空気が変わる。

「君はそれでいいのかな？」

「何？」

「相手はコカビエルだ。神話の怪物、この上ない強敵に、たった二人で立ち向かうのはあまりに無謀だよ。まして、そんな死地に幼なじみを送り出す訳にはいかないな。」

その言葉にイリナは目を潤ませ、頬を赤らめる。まさに虜と言った様子だ。

「何が言いたいんだ？」

「簡単だよ。悪魔全体がダメなら、僕個人として、赤き龍として君に協力させてくれないかな？」

瞬間。異様な気配が放たれる。

それは明確にゼノヴィアへと向けられた物だと理解するのに時間は必要なかった。  
(これは、魔術行使!? 精神干渉系か!)

気付いたが遅い。

すでに魔術はゼノヴィアに向けて放たれている。

おそらくは『魅了』の魔術。

兵藤一誠の狙いは、ゼノヴィアを傀儡とする事——!

「——甘いな。」

放たれた魔術は、しかしゼノヴィアには届かなかつた。

否、届く前に斬られたのだ。

物理的に剣を振るつた訳でも、切断系の術式を使った訳でも無い。

おそらくは剣気。あまりにも鋭い気迫で這い寄る魔術を両断したのだ。

「……………!!??」

「生憎と、私はソレに流されるほどヤワじゃないよ。」

声と視線は、先ほどよりも幾分か冷たい。

軽蔑、或いは嫌悪か。どうあれ良い感情が含まれていないのは確かだった。

「さて、それじゃあ私は失礼する。行くぞイリナ。」

「うーっ！ イッサー君！ またね！」

さっさと行こうとするゼノヴィアと、名残惜しそうに離れるイリナをなんとも言えない表情で見送る兵藤一誠。

と、その時ゼノヴィアの足が止まった。

「君は、アーシア・アルジェントか？」

視線の先にいるのは、金髪の少女。かつて教会を追放されたシスターだった者。名を呼ばれたアーシアは驚き、怯えたように顔を下げる。

「……怯えなくていい。一つ聞きたいだけさ。」

「……なんででしょうか？」

「君はまだ、神を信じているのか？」

その問いかけは、あまりにも静かだった。或いは、ゼノヴィアが一切の音を許してないのか。現に、何か口を開きかけたイリナと兵藤一誠に睨みを効かせて封殺している。

「……はい。ずっと、信じていましたから。」

「そうか。君は一途なんだな。」

そう言つて、彼女は歩き出す。

「けど今君は、本当に自分で立っているのかな？」

その疑問を、小さく呟きながら。

そのまま扉を開けて出ようとした時。

数本の魔剣が、ゼノヴィアと扉の間に割り込んだ。

「……穏やかじゃないね。」

「驚いた。これだけ殺気を飛ばしてるのに、ずっと無視されるとは思わなかったよ。」

声は右から。扉の横の壁に背を預けていた木場が自身の神器を使い、魔剣を出現させて道を塞いだのだ。

「すまないな。殺気を飛ばされる理由に、心当たりが無くてね。」

「聖剣計画と言えればわかるかな？一応君の先輩に当たるんだよ。失敗作のね……！」

怒りが膨張する。創られる魔剣はその怒りに呼応して妖しさを増していく。

「それで？君は何に怒っている？何が憎い？」

「決まっているだろう！僕は聖剣が憎い!!？」

叫びと共に魔剣が握られる。

まさに一触即発。いつ斬り合いが始まったもおかしくない状況で、しかしゼノヴィアの声はあまりにも冷静だった。

「聖剣が憎い……か。」

「ああそうだ!!？!!？」

「ならば何故、君の瞳は揺れている？」

「！」

まるで全てを、見透かしているような。

「何故鋒が震えている？何故君はそんなにも何かを食いしぼる様な顔をしているんだ。」

「そ、それは、」

動揺する木場に、しかしゼノヴィアは容赦しない。

「曇った剣に鈍った刃。それで一体何が斬れるというんだ。」

ゼノヴィアは落ち着いた様子で木場の持つ魔剣を素手で掴むと、あっさりと握り潰した。

「な、あつ……!!?」

「芯がない……いや、ブレているのか。だからこうしてすぐに砕け散る。」

言って、今度は扉の前に突き刺さる魔剣を、腕の一振りですべて叩き砕く。

「大方誰かに指摘されたのだろう？その憎しみの在処をどうするか揺れている。だから君は今、こんなにも脆い。」

扉を開け、部屋から出て行くゼノヴィアは最後にこう告げる。

「剣を振るい、前へ進むのはいつだって己だ。その理由の核に、他人を置いちやダメなんだよ。」

その言葉に、木場は何一つ返す事ができなかつた。